



Title	＜翻訳＞アルムファッダリーヤート試訳（60-75）
Author(s)	池田， 修
Citation	アラブ・イスラム研究. 2017, 15, p. 1-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105977
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アルムファッダリーヤート試訳

— (60) ムフリズ・ブヌ・アルムカアビル・アッダッビー —

مُحَرَّرُ بْنُ الْمُكْعَبِرِ الضَّبِّيِّ

池田 修*

まえがき

この詩の本名は伝えられていない。ただし、アッダッビーとあるのでダッバ族の出であろう。この詩では第二次アルクラブの戦で詩人が属するダッバ族がタミーム系の部族連合アッリバーブに加わりヤマン系のマズヒジュ連合軍を打ち破ったことを誇っている。この戦いについては No. 30 および No. 32 で触れたが、A.D. 611 または同612年ごろに起こったものと推定されている。詩人自身はこの戦いには参加していない。この詩はイスラーム以前に詠まれたものと考えられる。しかし、その後、詩人がイスラームに入信したのかどうか詳細は分からない。

彼の詩はハマーサ詩集に2編載せられている。その解説によると、戦いの知らせが届いた日、彼はバヌー・バクル・ブヌ・ワーイル (Banū Bakr b. Wā'il) のもとに身をよせていたとあり、または、バヌー・アディー・ブヌ・ジュンダブ (Banū 'Adī b. Jundab) に庇護されていた、ともいわれている。彼の名はアルムカアビル (al-Muka'bir) または、アルムカアバル (al-Muka'bar) の二様の読みがなされている。ka'bara (人々を刀で切る) の分詞である。バシート調、7行。

(60) テキスト

وَقَالَ مُحَرَّرُ بْنُ الْمُكْعَبِرِ الضَّبِّيِّ
وَلَمْ يَلْحَقْ يَوْمَ الْكُلَابِ

- | | |
|--|---|
| ١١- فِدَى لِقَوْمِي مَا جَمَعْتُ مِنْ نَشَبٍ | إِذْ لَقِيتِ الْحَرْبُ أَقْوَامًا بِأَقْوَامٍ |
| ٢١- إِذْ خُيِّرْتُ مَذْجِجَ عَنَّا وَقَدْ كُذِبَتْ | أَنْ لَنْ يُورَعَ عَنْ أَحْسَانِنَا حَامٍ |
| ٣١- دَارَتْ رَحَانًا قَلِيلًا ثُمَّ صَبَحَهُمْ | ضَرْبٌ يُصَيِّخُ مِنْهُ جِلَّةُ الْهَامِ |
| ٤١- طَلَّتْ ضِبَاعُ مُجَيْرَاتٍ يَلْدُنَ بِهِمْ | وَالْحَمُوهُنَّ مِنْهُمْ أَيْ الْإِحَامِ |
| ٥١- سَارُوا إِلَيْنَا وَهُمْ صَيْدٌ رُؤُوسُهُمْ | فَقَدْ جَعَلْنَا لَهُمْ يَوْمًا كَأَيَّامِ |

* 大阪外国語大学 名誉教授

〔池田修先生のご意向により、本号掲載の「試訳」校正は高階が担当しました。〕

٦١- حَتَّىٰ حُدْنَتْ لَمْ تَنْزُكْ بِهَا ضُبْعًا إِلَّا لَهَا جَزْرٌ مِنْ شَلْوٍ مِقْدَامٍ
٧١- ظَلَّتْ تَدُوسُ بَنِي كَعْبٍ بِكَلْكِلِهَا وَهُمْ يَوْمَ بَنِي هَدٍ بِإِطْلَامٍ

(60) 訳

- 1- 戦争が部族と部族を包み激化したとき、私は集めた不動産をすべてわが部族のために犠牲にしたいものだ。
- 2- マズヒジュ連合軍は我らに関して偽情報を告げられた。すなわち、我らには貴い家系を守るために立ちふさがる者は一人もいない、と。
- 3- 我らは（戦争の）白¹⁾が少し回ると、彼らに一撃が加えられ、その音に呼応してハーム鳥が大声で鳴いた。
- 4- ハイエナが彼らが横たわるムジャイラートの地を徘徊し、彼らはふんだんに自らの肉を与えた。
- 5- 彼らは（おごり高ぶり）頭を上げて進撃してきた。（彼らと戦った）日は一日がまるで数日のように長かった²⁾。☞
- 6- （敵の拠点）フズンナにおいてさえ、我らは敵の司令官の肉片をハイエナの全てに与えた。
- 7- 戦争はカアブの一族³⁾をその胸で押しつぶしてやまず、彼ら、すなわちなフド族の（戦いの日がもたらす）運命は闇のなかにおかれていた。☞

1) 戦争は白でしばしば表現される。ハーム (hām) は復讐を待つ死者のために鳴く想像上の鳥で梟のような姿をしているとされる。なお、hām は頭を意味する集合名詞でもある。

2) 第二次アルクラブの戦いは二日で終わった。この一行は、われらは彼らに一日千秋の思いで備えていた、の訳も考えられる。

3) バヌー・カアブ (Banū Ka'b) はナジュラーンのバヌー・アルハーリス・ブヌ・カアブ (Banū al-Hārith b. Ka'b) のことでアブド・ヤグース (ʿAbd Yaghūth) の一族に属し、ナフド (Nahd) 族と同盟していた。ナフドはクダーア (Qudā'a) 系のアルヤマンのサラートを拠点とした一族で、マズヒジュ連合の一員。戦争の胸とは、ラクダが脚を折って伏せ胸で地面を押さえる姿を連想したもの。下の句はやや難解。

— (61) サアラバ・ブヌ・アムル —

ثُعْلَبَةُ بْنُ عَمْرٍو

まえがき

本名サアラバ・ブヌ・ハズヌ・ザイド・ブヌ・アルハーリス (Tha^{al}aba b. Hazn b. Zayd b. al-Ḥārith)。アブー・ウバイダ (°Abū °Ubayda) によると、詩人はアブド・アルカイス族系のバヌー・スライマ (Banū Sulayma) 族の一員である、としている。

アブド・アルカイスについては、No. 28 で紹介した。一方、アルアスマイーは、詩人はアブドカイスと連合していたシャイバーン族の者と伝えている。また、この詩人はイブン・ウンム・ハズナ (°Ibn °Umm Ḥazna) という名でも知られている。彼の詩は本詩集 No. 74 にも載せられている。

いずれにせよ、何時ごろの人物であったか詳細は分からない。ただし、作品の内容から見て、ジャーヒリーヤ時代に詠まれたものと考えられる。一行目のアスマーウは詩人の娘。詩人は名前が不明な男と戦い、逃げる相手を背後から斬りつけ、負傷をさせる。この傷が相手に不名誉の評を加えるなどと、と詠んでいる。ムタカーリブ調、14行。

(61) テキスト

وَقَالَ ثُعْلَبَةُ بْنُ عَمْرٍو

- | | | |
|------|--|---|
| ۱۱ - | أَسْمَاءُ لَمْ تَسْأَلِي عَنْ أَبِي | لَكَ وَالْقَوْمُ قَدْ كَانَ فِيهِمْ خُطُوبٌ |
| ۲۱ - | إِنَّ عَرِيًّا وَإِنْ سَاءَنِي | أَحَبُّ حَبِيبٍ وَأَدْنَى قَرِيبٍ |
| ۳۱ - | سَأَجْعَلُ نَفْسِي لَهُ جُنَّةً | بِشَاكِي السِّلَاحِ نَهْيِكِ أَرِيبٍ |
| ۴۱ - | وَأَهْلَكَ مُهَرَّ أَيْيِكَ الدَّوَا | ءُ لَيْسَ لَهُ مِنْ طَعَامٍ نَصِيبٍ |
| ۵۱ - | خَلَا أَنَّهُمْ كُلُّمَا أَوْرَدُوا | يُضَيِّحُ فَعَبًا عَلَيْهِ ذُنُوبٌ |
| ۶۱ - | فَيُصْبِحُ حَاجِلَةً عَيْنُهُ | لِحَنُو أَسْتِهِ وَصَلَاةِ غُيُوبٍ |
| ۷۱ - | فَأَعْدَدْتُ عَجَلَى لِحُسْنِ الدَّوَا | ءُ لَمْ يَتَلَمَّسْ حَشَاهَا طَبِيبٌ |
| ۸۱ - | أَخِي وَأَخُوكَ بِيْطْنِ النَّسَبِ | رَ لَيْسَ بِهِ مِنْ مَعَدِّ عَرِيبٍ |
| ۹۱ - | فَأَقْسَمَ بِاللَّهِ لَا يَأْتِلِي | وَأَقْسَمْتُ إِنْ نَلِئْتُ لَا يُؤُوبٌ |
| ۱۰ - | فَأَقْبَلَ نَحْوِي عَلَى قُدْرَةٍ | فَلَمَّا دَنَا صَدَقْتُهُ الْكَذُوبُ |
| ۱۱ - | أَحَالَ بِهَا كَفَّهُ مُدْبِرًا | وَهَلْ يُنْجِيَنَّكَ شَدُّ وَعِيبٍ |
| ۱۲ - | فَتَبَعْنُهُ طَعْنَةً ثَرَةً | يَسِيلُ عَلَى الْوَجْهِ مِنْهَا صَبِيبٌ |

۱۳- فَإِنْ قَتَلْتَهُ فَلَمْ آلهُ وَإِنْ يَنْجُ مِنْهَا فَجُرْحُ رَغِيبٍ
 ۱۴- وَإِنْ يَلْقَنِ بَعْدَهَا يَلْقَنِ عَلَيْهِ مِنَ الدُّلِّ ثَوْبٌ فَشَيْبٌ

(61) 訳

- 1- アスマーウよ、そなたは父の消息を尋ねないのか¹⁾。部族の者たちに難事が降りかかっているのだ。
- 2- まことにアリーブ²⁾は私を悩ますとしても、私³⁾の最も親しい友であり、最も近い血筋の者だ。
- 3- 私は彼に対して、自身を防盾とするであろう。すなわち、完全武装をした勇敢で練達の戦士となって備える。
- 4- そなたの父の子馬は減食のため死んでしまった⁴⁾。十分な食べ物にありつけなかったのだ。
- 5- だが、彼らは（子馬に）水を与える時には大きな椀にミルクを入れ、それにパケツで水をつぎ込む始末だった（このため、ミルクは薄くなり栄養不足のもとになる）。
- 6- それゆえ、子馬の目は窪み、尾の周りの尻肉はやせ細ってしまった。
- 7- 私は愛馬アジュラーに適切な（ダイエットの）処置を施したので⁵⁾、その内臓は獣医を呼んで調べてもらう必要はなかった。
- 8- 私の兄弟とそなたの兄弟はアンヌサイル溪谷にいたが、あたりにはマアッドの者は一人もいなかった。
- 9- そこで、私は神に、遅れをとらない、と誓った。また、私は、捕らえれば刺し殺して家には帰さない、と誓った⁶⁾。
- 10- 彼は内心勝てると思って私に向かってきた。だが、彼が近寄ってきたとき、うそを告げた内心が真実を伝えた。
- 11- そこで、彼は手綱を引いて馬の向きをかえ逃げようとした。その馬が全速力で貴様を助けると思っているのか。
- 12- 私は彼を追って、槍で一刺しして、大きな傷口をあけた。そこから、彼の背⁷⁾に血が吹き出した。
- 13- もし、槍の一刺しで彼を殺して手落ちがなければよかったのだが。だが、たとえ、彼が逃げおおせたとしても、広い傷をうけている。

1) 文頭の疑問詞は ʾa-lam tasʾālī（そなたは尋ねないのか）の ʾa が前置されたもの。イムル・アルカイスのムアッラカ71行、ʾa-šāhi tarā barqan（友よ稲妻を見ないか）と同じ例。

2) アリーブ（ʿArīb）は詩人を悩ます男であるが、詩人は友情を示して耐えた、の意。

3) 私とは詩人のこと。前置詞の bi は説明的なもので、No. 42, 13 行を参照。

4) ad-dawāʾ はダイエット食のことで、これが不足することを、tark ad-dawāʾ と言うが、ここでは tark が省略されている。ダイエット食とはミルクを水で薄めたものであることが分かる。薄めすぎると栄養不足となる。

5) 4行の子馬の減食と比較している。獣医は内臓の病気や、妊娠しているかなどをみるが、戦争に使う雌馬は常に不妊にして置かれた。

6) 戦う相手が不明のままである。

7) ʿalā l-wajh（顔面）では背後から刺したと矛盾するので、アルアスマイーが伝えている ʿalā l-matn（背面）で訳した。

- 14- これより後、彼が生きていて、私にあったなら、新たな屈辱の衣をまとって会うことになろう。

— (62) アルハーリス・ブヌ・ヒッリザ・アルヤシュクリー —

الحَارِثُ بْنُ حِلْزَةَ الْيَشْكُرِيَّ

まえがき

この詩人はムアッラカート詩人のひとりであり、また、本詩集 No. 25 にも彼の作品が載っている。

この詩は3部分よりなる。1-3行においては恋人の幻が旅先の宿場に夜訪れる。4-6行では飲酒と狩自慢をしている。7-10行では自部族を賞賛している。

10行で部族を表すのにイマーラ (‘imāra) という語を用いて、彼の部族が強大であることを暗示している。解説によるとアブー・ジアウファルの所伝として、集団の規模は次の順序で大きくなるとある。

‘ashīra (faṣīla) - fakhdh - baṭn - ‘imāra - qabīla - sha‘b

カーミル調、10行。

(62) テキスト

وَقَالَ الْحَارِثُ بْنُ حِلْزَةَ الْيَشْكُرِيَّ

- | | |
|--|---|
| سَدِكَ بِأَرْحَلِنَا وَمَ يَتَعَرَّجُ | ١١ - طَرَقَ الْخَيْالُ وَلَا كَلِيلَةَ مُدْلِجِ |
| وَالْقَوْمُ قَدْ قَطَعُوا مِتَانِ السَّجْسَجِ | ٢١ - أَنَّى اهْتَدَيْتِ وَكُنْتِ غَيْرَ رَجِيلَةٍ |
| إِلَّا مُوَاشِكَةَ النَّجَا بِالْهُودَجِ | ٣١ - وَالْقَوْمُ قَدْ أَنَاوَا وَكَلَّ مَطِيئُهُمْ |
| وَضِبَاءِ مَخْنِيَةٍ دَعَرْتُ بِسَمْحَجِ | ٤١ - وَمُدَامَةٍ فَرَعْتُهَا بِمُدَامَةٍ |
| صَقَّرَ يَلُودُ حَمَامُهُ بِالْعَوْسَجِ | ٥١ - فَكَأَنَّهُنَّ لَالِيٌّ وَكَأَنَّهُ |
| فَإِذَا أَصَابَ حَمَامَةٌ لَمْ تَدْرُجِ | ٦١ - صَقَّرَ بَصِيدُ بِظُفْرِهِ وَجَنَاحِهِ |
| وَتَبَيَّنَتْ رِعَهُ الْجَبَانِ الْأَهْوَجِ | ٧١ - وَلَئِنْ سَأَلْتِ إِذَا الْكُتَيْبَةُ أَجَحَمَتْ |
| وَقَعَ السَّحَابُ عَلَى الطَّرَافِ الْمُشْرِجِ | ٨١ - وَحَسِبْتُ وَقَعَ سُيُوفُنَا بِرُؤُوسِهِمْ |
| رَتَكَ النَّعَامِ، إِلَى كَيْفِ الْعَرْجِ | ٩١ - وَإِذَا اللَّفَاحُ تَرَوَّحَتْ بِعَشِيَّتِهِ |
| إِنْ لَمْ يَكُنْ لَبَنٌ فَعَطْفُ الْمُدْمَجِ | ١٠ - أَلْفَيْتَنَا لِلصَّيْفِ خَيْرَ عِمَارَةٍ |

(62) 訳

- 1- (かつての恋人の) 幻が夜訪れ我らの宿場に身を寄せるとは、何と素晴らしい夜か。
しかし彼女はそこに留まることなく (立ち去った)。

- 2- そなたは、いかにして迷わずにここに来れたのか。そなたは足が弱く、わが部族はアッサジュサジュの尾根を越えてはるかにここまで来ていたのだが¹⁾。
- 3- 夫人を乗せた籠を背にした駿足のラクダを除き、わが部族は長旅でつかれ、一同のラクダも同じく歩みが衰えていた。
- 4- 私は幾たび年季の入ったブドウ酒を飲み干したことか。また、溪谷の曲がり角で背の長い馬を駆ってなんと多くのカモシカを恐れさせたことか²⁾。
- 5- カモシカは（白くて）真珠のようである。私の馬は鷹のようで、鳩は身を守ろうとして棘が多いアウサジュの藪のなかに逃げ込む。
- 6- 鷹は爪と翼とで獲物をとらえる。鳩を襲うとすぐに殺めるので、鳩は動かなくなる（私の馬はこの鷹のようである）。
- 7- 軍勢が帰ってきて、愚かな臆病者の表情が明らかになったとき、もしそなたが尋ねたなら（、彼らは事情を話すだろう）³⁾。
- 8- そなたは我らの刃が彼らの頭にロープで張ったテントを豪雨が不断にたたきつけるような勢いで打ち下ろされたと思うであろう。
- 9- 乳房の張ったラクダが（冬の寒さを避けるため）夕方早めにダチョウのような早足でアルアルファジュ木で作った囲いの中にかえると⁴⁾、
- 10- そなたは我らが最善の部族であることにきづくであろう。すなわち、（客に振る舞うべき）ミルクが無いときには我らは矢占い⁵⁾をしてラクダの肉でもてなす。

1) アッサジュサジュ (as-sajsaj) は山の固有名詞と思われるが、広大で平坦な地表が固い土地の意味もある。一行目の幻は二行目では二人称女性にかわっている。

2) 溪谷の曲がり角は流れが穏やかになり、土砂が積もりやすく広い草原となり、野獣の住処になり、猟場となる。

3) la-ⁱⁿ の条件節の主文がかけているので意味があいまい。

4) 冬の寒い季節には、食べる草も少ないので寒さよけのためラクダを早めに囲いに入れる。アルアルファジュ al-^{ar}faj は棘の多い灌木でよく燃える。

5) マイシルゲームをしてラクダを殺して客に肉を振舞うことを述べている。al-mudmaj とはマイシルゲーム用の羽根がついていない賭け矢。

— (63) アミーラ・ブヌ・ジュアル —

عَمِيرَةُ بَن جُعَل

まえがき

本名アミーラ・ブヌ・ジュアル・ブヌ・アムル (°Amīra b. Ju°al b. °Amr)。イブン・クタイバは『詩と詩人達の書』p. 411 で、ジュアルをジュアイル (Ju°ayl) とし、カアブ (Ka°b) とアミーラはともにジュアイルの息子であるとしている。両者とも、出自はタグリブ族であるが、前者はカアブ・ブヌ・ジュアイルでイスラーム時代（ウマイヤ朝）の詩人であり、後者はジャーヒリーヤ時代の詩人で、全く別人である。

この詩人は、自部族であるタグリブ族の血筋は母方は由緒正しいが父方が卑しい者により汚されていると中傷し、その後で中傷したことを後悔したと伝えられている。

前記のカアブはアンサルルを中傷したあと後悔したといわれており、イブン・クタイバの混同が生じたのかもしれない。タウィール調、5行。

(63) テキスト

وَقَالَ عَمِيرَةُ بْنُ جُعَلٍ

مِنَ اللُّؤْمِ أَظْفَارًا بَطِيئًا نُصُولُهَا	١١ - كَسَا اللَّهُ حَيِّي تَغْلِبَ ابْنَةُ وَائِلٍ
هَبْجَانًا، وَلَكِنْ عَقَرْتُهَا فُحُولُهَا	٢١ - فَمَا بِهِمْ أَنْ لَا يَكُونُوا طُرُوقَةً
أَخِي سَلَّةٍ قَدْ كَانَ مِنْهُ سَلِيلُهَا	٣١ - تَرَى الْحَاصِنَ الْعَرَاءَ مِنْهُمْ لِيَشَارِفِ
إِذَا اسْتَسْعَلَتْ حِنَانُ أَرْضٍ وَغُولُهَا	٤١ - قَلِيلًا تَبْعِيهَا الْفُحُولَةَ غَيْرُهُ
عَلَيْهِمْ، وَرَكُّوا وَفَدَهُمْ يَسْتَفِيلُهَا	٥١ - إِذَا ارْتَحَلُوا مِنْ دَارِ ضَيْمٍ تَعَادَلُوا

(63) 訳

- 1- 神がワーイルの娘タグリブの二部族に¹⁾、はずすのに手間取る卑賤な鉤爪の衣を着せ給え。
- 2- すなわち、彼らの母が由緒正しい純潔の雌ラクダでないと言うわけではなく、種ラ

1) タグリブはよく ibnatu Wā'il (ワーイルの娘) と言われる。これは、ibnu Wā'il (ワーイルの息子) を韻律上の理由から変えた表現かもしれない。ここでタグリブの二つの部族と言うのは、イラク周辺に移住してキリスト教徒になったグループと、移住しなかったグループのことと思われる。

クダが彼女を泥まみれにしたからである²⁾。

- 3- 彼らのなかの輝かしい顔をした貞淑な女性が、(他人の) 血統を盗んだ老いぼれと結婚して生まれた子供を君は見るだろう³⁾。
- 4- また、地上のジンやグールが凶悪無比なシウラに変身する(困難な) ときを迎えても、この貞淑な妻は夫以外の者をめったに頼りにしない⁴⁾ (、のを君はみるだろう。)
- 5- 彼らは抑圧された土地から移動しても、(移動したことで) いがみ合い、使者を(元の地に) 送って移動したのは落ち度であったと許しを求める⁵⁾。

2) タグリブは祖先の男性側に卑しい血があり、子孫が卑しめられる、といったもの。

3) 他人の血統を盗んだ、どこかの馬の骨とも知れぬ男の血が混ざっているとしたもの。解説では *salīlu-hā* の接尾代名詞は *salla* (盗み) を受ける、とあるが、貞淑な女性 *al-hāṣin* を受けるとするほうが自然である。

4) 純血でない夫にいつも頼ると非難しているかのようだ。[校正者注：シウラ *si'lā* 「お化け女」]

5) 故地から移動して新たな土地に住む者は、故地に残った者とは等しくない、との考え方を表明しているものと思われる。

— (64) アミーラ・ブヌ・ジュアル —

عَمِيرَةُ بَن جُعَل

まえがき

この詩は、1-6行で荒れ果てた部族の宿営地の模様を語り、7-12行で二名の者に当てた脅迫、武器の自慢、相手部族が奴隷であることなどに言及している。しかし、敵対関係になった事情には触れていない。タウィール調、12行。

(64) テキスト

وَقَالَ عَمِيرَةُ أَيْضًا

- | | |
|---|---|
| خَلْتُ حَجَجٌ بَعْدَى لَهْنٍ ثَمَانٍ | ١١- أَلَا يَا دِيَارَ الْحَيِّ بِالْبَرْدَانِ |
| وَعَيْرُ أَوَارٍ كَالرَّكِيِّ دِفَانٍ | ٢١- فَلَمْ يَبْقَ مِنْهَا غَيْرُ نُؤْيٍ مُهْدَمٍ |
| بِهَا الرِّيحُ وَالْأَمْطَارُ كُلُّ مَكَانٍ | ٣١- وَعَيْرُ حَطُوبَاتِ الْوَلَائِدِ دَعْدَعَتْ |
| يَظُلُّ بِهَا السَّبْعَانِ يَعْتَرِكَانِ | ٤١- قِفَارُ مَرُورَةٍ يَحَارُ بِهَا الْقَطَا |
| فَمِصَصِينَ أَسْمَاطًا وَيَرْتَدِيَانِ | ٥١- يُثِيرَانِ مِنْ نَسَجِ التُّرَابِ عَلَيْهِمَا |
| عَلَى جَانِبِ الْأَرْجَاءِ عُودُ هِجَانٍ | ٦١- وَبِالشَّرَفِ الْأَعْلَى وَخُوشٍ كَأَنَّهَا |
| أَخَا طَارِقٍ، وَالْقَوْلُ ذُو نَفْيَانِ | ٧١- فَمَنْ مُبْلَغٌ عَنِّي إِيَّاسًا وَجَنْدَلًا |
| جَمَعْتُ سِلَاحِي رَهْبَةً الْخَدَثَانِ | ٨١- فَلَا تُوعِدَانِي بِالسِّلَاحِ فَإِنَّمَا |
| سَنَا لَهَبٍ لَمْ يَسْتَعِنِ بِدُخَانِ | ٩١- جَمَعْتُ رُذَيْيًّا كَأَنَّ سِنَانَهُ |
| بِرَمَّانٍ لَمَّا أَجْدَبَ الْحَرَمَانِ | ١٠- لِيَالِي إِذْ أَنْتُمْ لِرَهْطِي أَعْبُدُ |
| وَإِذْ أَنْتُمْ لَيْسَتْ لَكُمْ غَنَمَانِ | ١١- وَإِذْ لَهُمْ ذَوْدٌ عِجَافٌ وَصَبِيَّةٌ |
| وَأَمَّاكُمَا مِنْ قَيْنَةٍ أَمْتَانِ | ١٢- وَجَدَّاكُمَا عَبْدًا عَمِيرَ بَنِ عَامِرٍ |

(64) 訳

- 1- おお、アルバラダーンの部族の宿営地の跡よ¹⁾、私がここを去ってから、既に八年が過ぎた。

1) アルバラダーン (al-Baradān) は ḥazn Yarbū° (ヤルブーウ族の高原) とされている。そこは春になるとラクダの放牧に適した土地であった。しかし、詩人の部族タグリブがバサースの戦いのあと、上バビロニアに移住していたこととうまくそぐわない。タグリブがイラクに移住する前のアルヤマーマ地方の地名の可能性が高い。

- 2- そこには（テントの周りの水よけ用の）壊れた溝と、崩れた井戸のように砂に埋もれた馬をつなぐ数本の杭だけがのこっている。
- 3- また、そこには奴隷娘が集めて来た薪が風雨にさらされてあたりに散らかっていた。
- 4- 荒れ果てて、草木も水気もなく、砂ライチョウも（水がないために）当惑するほどで、一日中、二頭の野獣が餌をめぐって争っている。
- 5- 二頭は土ぼこりを立て、ぼろぼろの埃のシャツを織り、身にまとっている。
- 6- 丘のいただきでは、野獣どもが見下ろしているが、それは、あたかも、純血種のラクダが周りに子ラクダをつれて見下ろしているようだった。
- 7- 私の言葉をイヤースとターリクの兄弟ジャンダルに伝えてくれるの者はいないか。言葉はとにかく散りじりに伝わるものだから²⁾。
- 8- 両名よ、武器で私を脅してはならぬ。すなわち、私は事件の恐怖に備えて武器をととのえているからだ。
- 9- 私はルダイニー産の槍を手に入れているが³⁾、その穂先は煙で曇ったところが無く、炎のように光っている。
- 10- 私は、ふたつの聖地が飢饉に襲われ、お前たちがわが一族の奴隷であったころの夜（この槍を手に入れたのである）⁴⁾。
- 11- 当時、彼らはやせ衰えたラクダ数頭と少年若干名を持っており、お前たちは二群の羊さえ持っていなかった。
- 12- その上、お前たちの両名の祖父は、ウマイル・ブヌ・アーミルの奴隷で⁵⁾、それぞれの母は奴隷である歌姫から生まれた奴隷であった。

2) 言葉が木の葉が散るように、あちこちに散らかつて伝えられるの意。

3) ルダイニー（Rudayni）については No. 12, 16行の注を参照。

4) カイナ（qayna 歌姫）は奴隷として売買されていた。

5) ウマイル（ʿUmayr）はアムル（ʿAmr）のことを蔑んで縮小形にしたものであろう。

—— (65) ウフヌーン ——

أُفْنُون

まえがき

本名スライム・ブヌ・マアシャル・ブヌ・フバイブ (°Ufnūn - Şuraym b. Ma^cshar b. Ḥubayb)。

この詩人は彼の部族タグリブがイラクに住むようになったが、未だイスラームの宣伝がなされていない頃の人物と思われる。おそらくキリスト教徒であっただろう。

彼の綽名ウフヌーンの由来については諸説あって、いずれも決め手にかける。

アルムファッダルはこの詩が読まれた背景として、次のような逸話をつたえている。

詩人があるカーヒン（巫者）に自分の運命をたずねると、イラーハ（ilāha）と言う土地で死ぬだろう、と言われていた。部族の者たちとシリヤに旅に出かけたとき、用事を済ませ帰路についた。ところが、シリヤ（ダマスクス）とユーフラテスのあいだの砂漠で道に迷ってしまった。そこで、出会った男に道を尋ねたところ、これこれの方角に進めば街道に出てイラーハが見えてくる、と教えてくれた。彼はこれに従い、やがて、イラーハについた。仲間はラクダから降りて宿営の準備に取り掛かったが、彼だけはラクダから降りず、藪のアルファジュ（°arfaj No. 62, 9行の注を参照）をラクダに食べさせていた。そのラクダに蛇が噛み付いた。ラクダは口におら下がった蛇を振り落とそうとして首を曲げたところ、蛇は詩人の足に噛み付いた。そこで、詩人は兄弟であるムアーウィヤ（本詩1行）に向かって“もうだめだ、墓を掘ってくれ”と叫び、大声でこの詩を詠んだ。タウィール調、5行。

(65) テキスト

وَقَالَ رَجُلٌ مِّنْ بَنِي تَغْلِبَ يُلَقِّبُ بِأُفْنُونٍ

- | | |
|---|--|
| وَلَا الْمُشَفِّقَاتُ إِذْ تَبْعَنَ الْحَوَازِيَا | ١١ - أَلَا لَسْتُ فِي شَيْءٍ فَرَوْحًا مُعَاوِيَا |
| وَتَقُولُهُ لِلشَّيْءِ: يَا لَيْتَ ذَا لِيَا | ٢١ - فَلَا خَيْرَ فِيمَا يَكْذِبُ الْمَرْءُ نَفْسَهُ |
| وَإِنَّكَ لَا تُبْقَى بِمَالِكَ بَاقِيَا | ٣١ - فَطَأْ مُعْرِضًا، إِنَّ الْخُتُوفَ كَثِيرَةٌ |
| إِذَا هُوَ لَمْ يَجْعَلْ لَهُ اللَّهُ وَاقِيَا | ٤١ - لَعَمْرُكَ مَا يَذَرِي أَمْرُؤُ كَيْفَ يَتَّقِي |
| وَأَصْبَحَ فِي أَعْلَى إِلَاهَةٍ ثَاوِيَا | ٥١ - كَفَى حَزَنًا أَنْ يَرَحَلَ الْحَيُّ غُدُوَّةً |

(65) 訳

- 1- ああ、ムアーウィヤよ、私は何事にも多く喜ぶことがなかった。哀れみ深い婦人らがカーヒン（巫者）の予言に従っても益が無い（運命には逆らえぬ）。
- 2- 人は妄想を抱いてみてもどうなるものでもない¹⁾。“これはこのようであってくればよいが”と言ってみても、同様（運命は帰られぬ）。
- 3- よって、お前の思い通りに踏み出せ。死はいたるところで待ち構えており、お前の財産で、誰一人、生きながらえさせることは出来ないのだ。
- 4- 誓って言うが、神が守り手を配さなければ、人は死からいかに身を守るかのすべを知らぬ。
- 5- まことに悲しいことよ、部族の者たちは夜明けとともに旅立っていくが、私は上イラーハの丘の上の墓の主になるとは²⁾。

1) yakdhibu l-mar'u nafsahu は、妄想を抱くの意。

2) ʾIlāha は ʾUlāha ともしわれ、カルブ族のサマーワの地の丘。

— (66) ウフヌーン —

أَفْنُون

まえがき

詩人はある部族の成員を殺し、自部族バヌー・フバイブ (Banū Ḥubayb b. °Amr) に血償支払い用のラクダを提供するように、協力を求めた。しかし、部族は多数のラクダを所有していたが、この求めを拒み (6行)、彼を追放してしまった。しかし、この部族はイブン・サウワール (Ibn Sawwār) という者にはラクダを与えて助けた (7行)。ウフヌーンはこの扱いを不満だとして、部族を非難している。

この詩はウフヌーンによるものか、疑問点は多々ある。タグリブ族はイラクに住んでいたが、この詩には部族名や地名など南アラビアのものが多く記されているからである。

5行のアッサクーン (as-Sakūn) はヤマン南部およびハドラマウトあたりの部族で、タグリブ族とあまりかかわりがなかった、と考えられる。

また、8行のアーミル・ブヌ・サアサア族にも同様のことが言える。4行の有力者らもヤマン人である。6行にはルフバ (Ruḥba) とアルアダン (al-°Adan) の間、とあるが、アルアダンが定冠詞のつかないアダン (°Adan、今日のアデン) をさすのであれば、これもヤマン南部のことでタグリブとつながらない。なお、ヤーカートの地名辞典では al-°Adan となっているが、他の辞書では、°Adan には定冠詞がついていない。バシート調、9行。

(66) テキスト

وَقَالَ أَفْنُونُ أَيْضًا

- | | |
|--|--|
| أَنَّ الْفُؤَادَ انْطَوَى مِنْهُمْ عَلَى حَزَنِ | ١١- أَبْلَغُ حُبَيْبًا وَحَلَّلَ فِي سَرَائِهِمْ |
| مِنْ وَلَدِ آدَمَ مَا لَمْ يَحْلَعُوا رَسَنِي | ٢١- قَدْ كُنْتُ أَسْبَقُ مَنْ جَارُوا عَلَى مَهَلٍ |
| حَتَّى انْتَحَيْتُ عَلَى الْأَرْسَاغِ وَالْثُنَنِ | ٣١- فَالُوا عَلَيَّ وَلَمْ أَمْلِكْ فَيَالَتْهُمْ |
| رُيِّتُ فِيهِمْ وَلُقَمَانٍ وَمِنْ جَدَنِ | ٤١- لَوْ أَنَّنِي كُنْتُ مِنْ عَادٍ وَمِنْ إِزِمَ |
| أَخَا السَّكُونِ وَلَا جَارُوا عَلَى السُّنَنِ | ٥١- لَمَّا فَدَوْا بِأَخِيهِمْ مِنْ مُهَوَّلَةٍ |
| مَا بَيْنَ رُحْبَةٍ ذَاتِ الْعِيصِ وَالْعَدَنِ | ٦١- سَأَلْتُ قَوْمِي وَقَدْ سَدَّتْ أَبَاعِرُهُمْ |
| لِلَّهِ دَرٌّ عَطَاءٍ كَانَ ذَا غَبَنِ | ٧١- إِذْ قَرَّبُوا لِابْنِ سَوَّارٍ أَبَاعِرَهُمْ |
| أَمْ كَيْفَ يَجْزُونَنِي السُّوَايَ مِنَ الْحَسَنِ | ٨١- أَنَّنِي جَزَوُا غَامِرًا سُوَايَ بِنْفِعِهِمْ |
| رُتْمَانٍ أَنْفٍ إِذَا مَا ضُنَّ بِاللَّبَنِ | ٩١- أَمْ كَيْفَ يَنْفَعُ مَا تُعْطَى الْعُلُوفُ بِهِ |

(66) 訳

- 1- 私の言葉を（私の部族）フパイブに伝え彼らの首脳者に、私の心は彼らにより悲し
みで覆われていると、伝えてくれ。
- 2- かつて、私は（わが部族が）競い合ったアダムの子らすべてを¹⁾、彼ら（私の部族）
が私を（部族内に）つなぎとめている間は、常に楽々と凌駕したものだ。
- 3- 彼ら（私の部族）は私についての判断を誤ったが、私は彼らの愚かさを抑えきれず、
ついに（追放され）下賤なならず者たちの仲間になった²⁾。
- 4- 私がアードやイラムやルクマーンやジャダンなどの血筋を引き彼らのなかで育てら
れいたなら³⁾（、よもやこのような仕打ちは受けなかったろうに）。
- 5- 私の部族は彼らの兄弟（である私）のために、（捕らえられていた）アッサクーンの兄
弟を⁴⁾、大きな災難を恐れて解放せず、慣行を踏みにじった。
- 6- 私はわが部族に助けを求めた。彼らのラクダは茂みの多いルフバとアルアダンの間
をふさぐほど多数いる⁵⁾。
- 7- 彼らは（私の求めを拒んだが）イブン・サウワールにはラクダを与えたではないか。
彼は愚か者であったが、なんとよき贈り物であったことか。
- 8- いかにして、彼らはアーミル（・ブヌ・サアサア族）に善行に対して悪行で報いた
のか。いかにして、私の善行に対して彼らは悪行で報いるのか⁶⁾。
- 9- あるいは、乳の出ない雌ラクダが（子ラクダに）与えるものがなにの役にたつか。
乳を出し惜しみ、鼻で可愛がるだけではないか⁷⁾。

1) 「競い合う」とは、詩で中傷したり、誇りあったりすること。

2) al-arsāgh (足の甲)、ath-thunan (馬の毛爪の毛)、とは、下賤なスウルク集団のこと。

3) コーランでは古代の民としてアード (ʿĀd) が語られ、その都がイラム (ʿIram) となっている。
ルクマーンはアードの王であったと言われる (No. 10, 36行参照)。ジャダン (Jadan) はズー・
ジャダン (Dhū Jadan) のことで、ヒムヤルの伝説上の王。彼の城がジャダンといわれ、王の本
名はアラス・ブヌ・アルハーリス (ʿAlas b. al-Hārith)。

4) アッサクーン (as-Sakūn) はキングダ系のヤマンの部族。詩人の部族が、捕らえられていたこの部
族の男を解放すれば詩人も解放されたのに、詩人の部族はこれに応じず、冷淡であったと非難
している。

5) これだけ多くのラクダを所有しているのだから、助けてくれてもよいではないかとの訴え。ル
フバ (Ruhba) は Ruḥba Ṣanʿā (サヌアのルフバ) と説かれているが、同名の地域がいくつもあ
り、特定しがたい。

6) この一行の前後関係は全く分らない。

7) 口先だけはうまく、実行が伴わないと、自部族を非難している。

— (67) ムタンミン —

مُتَمِّم

まえがき

この詩人については、すでに本詩集 No. 9 で概略を記した。ここにあげる詩はアラブ詩のなかで最も有名な哀悼詩とみなされているものである。イスラーム征服初期に、イスラームの剣といわれたハーリド・ブヌ・アルワリード (Khālid b. al-Walīd) が、詩人の兄弟マーリク・ブヌ・ヌワイラ (Mālik b. Nuwayra) をデイルール・ブヌ・アルアズワド (Dirār al-ʿAzwad) に命じて処刑した。これを知ったムタンミンはメデイナの預言者モスクを訪ねてカリフのアブー・バクルとウマルにマーリクを悼むこの詩を詠んで、不当な処刑だと訴えた。この事件については種々脚色された逸話が多く伝えられており、史実とみなすにはうたがわしい点もあるだろうが、『歌の書』(14, pp. 66-72) にタバリーからの引用があり、加えて、詩集校訂者の Lyall による概要説明もあり、これらを参照して事件の経過の概略を以下に紹介する。

ヒジュラ暦11年 (AD632)、預言者が没したが、その二年ぐらい前からイスラームを受け入れた多くの部族が、当時サダカとかザカートの名で呼ばれていた税の支払いを拒むようになった。

これはリッダ (Ridda、離反、背教) と呼ばれているが、その程度はまちまちであった。幾つかの部族長はラクダを貢納する姿勢を見せたが、大部分は、定めの手紙は守るが税の支払いは拒んだ。また一部には、偽預言者に従う部族もあった。たとえば、アサドとガタファーンはトライハ (Tulayḥa) という偽預言者に導かれた。タグリブ族の女預言者サジャーフ (Sajāḥ) にはタミームが、マスラマ (Maslama) という偽預言者にはハニーフ族が従った。初代カリフ、アブー・バクルがまず手がけなければならなかったのは、このリッダの動きを抑えることであった。ハーリド・ブヌ・アルワリードはそのための有力な手段として起用された。マーリク・ブヌ・ヌワイラは、すでに預言者によってタミーム系のヤルブーウ族の族長として認められていた。彼はリッダに当たって、二つの行動に出た。まず、彼の領域外である所のラフラハーン (Raḥrahān) に周辺の住民から税として集められていたラクダを奪った。次に、女預言者サジャーフに従い、自部族 (タミーム) のなかで彼女に従わないものたちと戦いを始めた。しかし、彼女がアルヤマーマに根拠を移したのに伴い、マーリクは彼女と決別した。他方、イスラーム軍の司令官ハーリドは、アルブザーハ (al-Buzākha) で偽預言者トライハおよびその信者らを打倒し、次いで、ハワージン連合軍を打ち破り、いよいよタミーム征伐にとりかかろうとしていた。

タミームの多くの指導者らはこのような情勢の中で、ハーリドに協力しようとしていた。ただ、マーリクだけは偽預言者サジャーフと連携したことを後悔しながら孤立していた。彼は配下の者たちに解散して各自の住まいに帰よう告げ、彼自身は若干の従者を連れて、ハズン・ヤルブーウ (No. 9, 6行の注を参照) のアルブター

フ (al-Buṭāh) というところに留まった。この地はアサド族の領域に接していた。彼は、預言者が命じた定め of 礼拝をしていたとのことである。ハーリドはマーリクの仇敵デイルール・ブヌ・アルアズワドを隊長とする偵察隊を派遣して、マーリクの様子を探らせた。その過程で戦闘があったらしく、マーリク一派は捕らえられた。彼らはハーリドのところに送られ、マーリクはイスラームに入信したと告白した。

そのあとどのようなようになったか伝承が異なっているが、ただいえることは、ハーリドはマーリクを処刑するよう命じ、デイルール・ブヌ・アルアズワドの手にかかって殺された。その上で、ハーリドはマーリクの妻ライラー (Laylā、彼女は ʾUmm Tamīm とか Bint al-Muhallab と呼ばれていた) を戦時捕虜とし、彼の妻として他の捕虜と共にメダイナに戻った。

これについての醜聞は、ハーリドが帰還するよりも一足早くメダイナに伝えられていた。ウマルはムスリムになっていたマーリクの処刑やその妻と結婚したとの知らせに衝撃を受け、ハーリドを犯罪者として裁くようにアブー・バクルに進言 (ʾinna fī sayfī khālīdin rahaqan, wa-ḥuqqa ʾalayhi ʾan yuqayyidahu. 「ハーリドの剣には非道な意図があり、彼を縛るのが至当である。」) したとのことである。ウマルは少なくとも司令官の地位を召し上げるべきだ、と具申した。

しかし、カリフのアブー・バクルは情勢が厳しく、ウマルの要求を拒み「神が背信者らに抜き給うた剣を私が鞘に納められるはずがない。」 (lam ʾakun li-ʾashīma sayfan sallāhu llāhu ʾalā l-kāfirīna.) と答えた。

ただし、アブー・バクルはハーリドに、ライラーを妻とすることはあきらめよ、他の捕虜は釈放せよ、マーリクの処刑に対しては血債を支払え、などの命令を出した。

それから二年後、アブー・バクルが没し、ウマルがカリフになると直ちにハーリドを解任した。しかし、ウマルはアブー・バクルが裁いたように、ハーリドをマーリクの殺害犯人として再審議することは拒んだようである。このことはマーリクの兄弟であるムタンミンが強く望んだことであつたが。

マーリクが殺されたのは、司令官ハーリドが用いたアラビア語が誤解されたためだとの逸話が伝えられている。史実ではないと思われるが、紹介する。

マーリクとその一派が捕らえられた日の夜は気温が急激に下がった。そこで、ハーリドは捕虜たちに暖衣を与えるように命じ、adfiʾū ʾasrākum 「そちたちの捕虜を暖めてやれ。」と言った。『歌の書』では、これは彼らを殺せの意味もあるとしている。Lyll は動詞 adfiʾū の語根 DFʾ (暖める) を DFW (送る、始末をつける) と取り違えたもの、としている。ムタンミンはマーリクのために多くの哀悼詩を詠んでいるが、いかに訳した詩が最も有名で第一級の作品とされている。

1行、控えめな表現。2-10行、死者を賞賛。11-14行、マーリクの悲劇への哀悼。15-16行、マイシルでの弱者救済。17-22行、使者への哀悼。23-28行、使者の安眠を願う。29-30行、過去の類似事件への言及。40-44行、詩人の悲しみ。45-51行、殺害者への怒り。タウィール調、51行。

(67) テキスト

وَقَالَ مُتَمِّمٌ بْنُ نُؤَيْرَةَ الْيَرْبُوعِيُّ

- ١١- لَعَمْرِي وَمَا دَهْرِي بِتَائِبِينَ هَالِكِ
 ٢١- لَقَدْ كَفَّنَ الْمِنْهَالُ تَحْتَ رِدَائِهِ
 ٣١- وَلَا بَرَمًا تُهْدِي النِّسَاءَ لِعَرْسِهِ
 ٤١- لَيْبٌ أَعَانَ اللَّبَّ مِنْهُ سَمَاحَةٌ
 ٥١- تَرَاهُ كَصَدْرِ السَّيْفِ يَهْتَزُّ لِلنَّدَى
 ٦١- وَيَوْمًا إِذَا مَا كَظَّكَ الْخَصْمُ إِنْ يَكُنْ
 ٧١- وَإِنْ تَلَقَّه فِي الشَّرْبِ لَا تَلْقُ فَاحِشًا
 ٨١- وَإِنْ ضَرَسَ الْعَزُّو الرِّجَالَ رَأَيْتُهُ
 ٩١- وَمَا كَانَ وَقَافًا إِذَا الْخَيْلُ أَجْحَمَتْ
 ١٠- وَلَا بِكَهَامٍ بَرُّهُ عَنْ عَدُوِّهِ
 ١١- فَعَيْنِي هَلَا تَبْكِيَانِ لِمَالِكِ
 ١٢- وَلِلشَّرْبِ فَابْكِي مَالِكًا وَلِلْهَمَةِ
 ١٣- وَضَيْفٍ إِذَا أَرْغَى طُرُوقًا بَعِيرُهُ
 ١٤- وَأَرْمَلَةٍ تَمْشِي بِأَشْعَثِ مُحْتَلٍ
 ١٥- إِذَا جَرَّدَ الْقَوْمُ الْقِدَاحَ وَأَوْقَدَتْ
 ١٦- وَإِنْ شَهِدَ الْأَيْسَارُ لَمْ يُلَفَ مَالِكُ
 ١٧- أَبِي الصَّبْرِ آيَاتُ أَرَاهَا وَأَتْنِي
 ١٨- وَأَتْنِي مَتَى مَا أَدْعُ بِاسْمِكَ لَا تُجِبْ
 ١٩- وَعِشْنَا بِخَيْرٍ فِي الْحَيَاةِ وَقَبْلَنَا
 ٢٠- فَلَمَّا تَفَرَّقْنَا كَأَنِّي وَمَالِكَا
 ٢١- وَكُنَّا كَنَدَمَانِي جَدِيمَةً حِقْبَةً
 ٢٢- فَإِنْ تَكُنِ الْأَيَّامُ فَرَقْنَ بَيْنَنَا
 ٢٣- أَقُولُ وَقَدْ طَارَ السَّنَا فِي رَبَائِهِ
 ٢٤- سَقَى اللَّهُ أَرْضًا حَلَّهَا قَبْرُ مَالِكِ
 ٢٥- وَآثَرَ سَبِيلَ الْوَادِيَيْنِ بِدِيمَةٍ
 ٢٦- فَمُجْتَمَعِ الْأَسْدَامِ مِنْ حَوْلِ شَارِعِ
 ٢٧- فَوَاللَّهِ مَا أُسْقَى الْبِلَادَ لِحَبَّهَا
 ٢٨- تَحِيَّتُهُ مِنِّي وَإِنْ كَانَ نَائِيَا
- وَلَا جَزَعٍ مِمَّا أَصَابَ فَأَوْجَعَا
 فَتَى غَيْرِ مِبْطَانِ الْعَشِيَّاتِ، أَرْوَعَا
 إِذَا الْقَشْعُ مِنْ حَسِّ الشِّتَاءِ تَفَعَّفَعَا
 خَصِيبٌ إِذَا مَا رَاكِبُ الْجُدْبِ أَوْضَعَا
 إِذَا لَمْ تَجِدْ عِنْدَ امْرِئِ السَّوْءِ مَطْمَعَا
 نَصِيرُكَ مِنْهُمْ لَا تَكُنْ أَنْتَ أَضْيَعَا
 عَلَى الْكَأْسِ ذَا قَادُورَةٍ مُتَرَبِّعَا
 أَخَا الْحَرْبِ صَدَقًا فِي اللَّقَاءِ سَمِيدَعَا
 وَلَا طَائِشًا عِنْدَ اللَّقَاءِ مُدَفَّعَا
 إِذَا هُوَ لَأَقَى حَاسِرًا أَوْ مُقَنَّعَا
 إِذَا أَدْرَتِ الرِّيحُ الْكَئِيفَ الْمُرْفَعَا
 شَدِيدٍ نَوَاحِيهِ عَلَى مَنْ تَشَجَّعَا
 وَعَانَ ثَوَى فِي الْقَدِّ حَتَّى تَكْنَعَا
 كَفْرُخِ الْحُبَارَى رَأْسُهُ قَدْ تَضَوَّعَا
 لَهُمْ نَارُ أَيْسَارٍ كَفَى مَنْ تَضَجَّعَا
 عَلَى الْفَرثِ يَحْمِي اللَّحْمَ أَنْ يَتَمَزَّعَا
 أَرَى كُلَّ حَبْلٍ بَعْدَ حَبْلِكَ أَقْطَعَا
 وَكُنْتَ جَدِيرًا أَنْ تُجِيبَ وَتُسْمِعَا
 أَصَابَ الْمَنَايَا رَهْطَ كِسْرَى وَتُبَّعَا
 لَطُولِ اجْتِمَاعٍ لَمْ نَبْتَ لَيْلَةً مَعَا
 مِنَ الدَّهْرِ حَتَّى قِيلَ لَنْ يَتَصَدَّعَا
 فَقَدْ بَانَ مَحْمُودًا أَحْيَى حِينَ وَدَّعَا
 وَجَوْنٍ يَسُخُّ الْمَاءُ حَتَّى تَرْتَبَّعَا
 ذَهَابِ الْعَوَادِي الْمُدْجَنَاتِ فَأَمْرَعَا
 تُرَشِّخُ وَسَمِيًّا مِنَ النَّبْتِ خِرْوَعَا
 فَرَوَى جِبَالَ الْقَرَيْتَيْنِ فَضْلَفَعَا
 وَلَكِنِّي أُسْقَى الْحَبِيبَ الْمُودَّعَا
 وَأُمْسَى تُرَابًا فَوْقَهُ الْأَرْضُ بُلْفَعَا

- ٢٩- تَقُولُ ابْنَةُ الْعَمْرِىَ مَالِكُ بَعْدَمَا
 ٣٠- فَقُلْتُ لَهَا: طُولُ الْأَسَى إِذْ سَأَلْتَنِي
 ٣١- وَفَقَدْتُ بَنِي أُمِّ تَدَاعَوْا فَلَمْ أَكُنْ
 ٣٢- وَلَكِنِّي أَمْضِي عَلَى ذَاكَ مُقَدِّمًا
 ٣٣- وَغَيْرَنِي مَا غَالَ فَيْسًا وَمَالِكًا
 ٣٤- وَمَا غَالَ نَدْمَانِي يَزِيدَ وَلَيْتَنِي
 ٣٥- وَإِنِّي وَإِنْ هَارَلْتَنِي قَدْ أَصَابَنِي
 ٣٦- وَلَسْتُ إِذَا مَا الدَّهْرُ أَخَذَتْ نَكْبَةً
 ٣٧- فَعِيدِكَ إِلَّا تُسْمِعِينِي مَلَامَةً
 ٣٨- فَقَصْرِكَ إِنِّي قَدْ شَهِدْتُ فَلَمْ أَجِدْ
 ٣٩- فَلَا فَرْحًا إِنْ كُنْتُ يَوْمًا بِغِبْطَةٍ
 ٤٠- فَلَوْ أَنَّ مَا أَلْقَى يُصِيبُ مُتَالِعًا
 ٤١- وَمَا وَجَدُ أَظَارِ ثَلَاثِ رَوَائِمِ
 ٤٢- يُذَكِّرُنْ ذَا الْبَيْتِ الْحَزِينَ بِبَيْتِهِ
 ٤٣- إِذَا شَارِفٌ مِنْهُمْ قَامَتْ فَرَجَعَتْ
 ٤٤- بِأَوْجَدَ مِنِّي يَوْمَ قَامَ بِمَالِكِ
 ٤٥- أَلَمْ تَأْتِ أَحْبَارُ الْمُجِلِّ سَرَاتِكُمْ
 ٤٦- بِمَشْمَتِهِ إِذْ صَادَفَ الْحَتْفُ مَالِكًا
 ٤٧- أَثَرْتُ هِدْمًا بَالِيًا وَسَوِيَّةً
 ٤٨- فَلَا تَفْرَحْنِ يَوْمًا بِنَفْسِكَ إِنَّنِي
 ٤٩- لَعَلَّكَ يَوْمًا أَنْ تُلِمَّ مُلِمَّةٌ
 ٥٠- نَعَيْتَ امْرَأً لَوْ كَانَ لَحْمُكَ عِنْدَهُ
 ٥١- فَلَا يَهْنِيءُ الْوَاشِينَ مَقْتَلُ مَالِكِ
- أَرَاكَ حَدِيثًا نَاعِمَ الْبَالِ أَفْرَعَا
 وَلَوْعَةُ حُزْنٍ تَتْرُكُ الْوَجْهَ أَسْفَعَا
 خِلَافَهُمْ أَنَّ أَسْتَكِينَ وَأَضْرَعَا
 إِذَا بَعْضُ مَنْ يَلْقَى الْحُرُوبَ تَكْعَكْعَا
 وَعَمْرًا وَجَزْءًا بِالْمُشَقَّرِ أَلْمَعَا
 تَمَلَّيْتُهُ بِالْأَهْلِ وَالْمَالِ أَجْمَعَا
 مِنَ الْبَيْتِ مَا يُبْكِي الْحَزِينَ الْمُفْجَعَا
 وَرُزْءًا بِرَوَّارِ الْقَرَائِبِ أَحْضَعَا
 وَلَا تَنْكَبِي قَرْحَ الْقُودِ فَيَجْعَا
 بِكَفَى عَنْهُمْ لِلْمَنِيَةِ مَدْفَعَا
 وَلَا جَزْعًا مِمَّا أَصَابَ فَأَوْجَعَا
 أَوْ الرُّكْنَ مِنْ سَلَمَى إِذَا لَتَضَعُضَعَا
 أَصَبَنَ مَجْرًا مِنْ حُورٍ وَمَصْرَعَا
 إِذَا حَنَّتِ الْأُولَى سَجَعْنَ لَهَا مَعَا
 حَنِينًا فَأَبْكِي شَجُوهَا الْبَرْكَ أَجْمَعَا
 مُنَادٍ بِصِيرٍ بِالْفِرَاقِ فَأَسْمَعَا
 فَيَغْضَبُ مِنْكُمْ كُلُّ مَنْ كَانَ مُوْجَعَا
 وَمَشْهَدِهِ مَا قَدْ رَأَى ثُمَّ ضَيَعَا
 وَجِئْتُ بِهَا تَعْدُو بَرِيدًا مُقَرَّعَا
 أَرَى الْمَوْتَ وَقَاعًا عَلَى مَنْ تَشَجَّعَا
 عَلَيْكَ مِنَ اللَّائِي يَدْعُنَا أَجْدَعَا
 لَأَوَاهُ مَجْمُوعًا لَهُ أَوْ مُمَرَّعَا
 فَقَدْ آبَ شَانِيهِ إِبَابًا فَوَدَّعَا

(67) 訳

- 1- 誓って言うが、死者を讀えたり、災難に襲われてその苦痛が加えられたことで悲嘆するのは私の常になすところではない（だが、兄弟マーリクの死は別だ）。
- 2- アルミンハールは（横たわっている）死者に外衣をかぶせたが¹⁾、死者は夕食時で大

1) アルミンハール (al-Minhāl) 本名 Ibn ʿIṣma al-Riyāhī. なお、Riyāh はヤルブーウ族の支族。彼は処刑されたマーリクの亡骸に経帷子代わりに自分の上着を脱いで覆ったの意。これが当時のあるべき慣行であった。夕食時は客が訪れる時間であり、これ等待つのが作法で、待たずに夕食に飛びつく者は大食漢とされ、非難される振舞いと見なされていた。

- 食する男ではなく、恐ろしいほどの美丈夫であった。
- 3- 彼（マーリク）は皮製のテントが冬の寒さで音をきしらせるとき、女たちが彼の妻に肉を恵んでくれるのをあてにして、マイシル（賭け矢）ゲームにすら加わらないけちな男ではなかった²⁾。
 - 4- 彼は賢明な人物で、寛大さが彼の心を支えていた。また、彼は飢餓に苦しむ者が急ぎ身を寄せる気前の良い男であった。
 - 5- 君は悪徳者のもとで欲しい物が見当たらないときでも、彼は剣のよう鋭く気づき、嬉々として恩恵を授けるのを見るであろう。
 - 6- 何時の日か、敵が君を返答が出来ないほど責め立て苦しめたとしても、ひとたび、彼が君の味方についたなら、君は決して負けないであろう³⁾。
 - 7- 君がもし、酒盛りしている人々のなかで彼に出会えば、気難して性悪な、酒の上で非道を働く者に出会うことはないであろう。
 - 8- もし、（略奪者の）襲撃が部族の男たちに牙をむいたなら、君は、彼が強固な戦いの守り手であり、勇氣ある長者であるのに気づくであろう。
 - 9- 騎馬武者らが怖気づいても、彼はたじろがなかった。戦闘においても、彼は軟弱ではなく、脇に退かされるような卑怯者でもなかった。
 - 10- また、彼の剣は、出会った敵が軽装備であろうが重装備であろうが、決してなまくらではなかった。
 - 11- しかるに、私の両目は寒風がラクダの高い編囲いを煽り立てるとき⁴⁾、何ゆえマーリクのために泣かないのか。
 - 12- （マーリクが酒やラクダの肉を振舞った）酒友だちのためにマーリクの死を嘆くがよい。勇敢な敵に立ち向かった英雄のために泣け。
 - 13- （マーリクのテントを訪れるため）なんと多くの夜の訪問者が道に迷い、ラクダをうならせたことだろう⁵⁾。また、（マーリクの庇護を求めて）手足に食い込むばかりの乾いた皮ひもで縛られた捕虜がなんと多くいたことだろう。
 - 14- （マーリクに助けを求めて）栄養不良で髪がもつれた子を連れて歩む、何と多くの未亡人がいたことだろう。その子はまるで毛羽立った野雁の雛のようであった。
 - 15- 人々が（マイシルゲームで）占い矢を筒から抜き、彼らのために賭け火が焚かれると、マーリクはゲームに参加できなかった者の希望をかなえた。
 - 16- マイシルゲームの賭け人たちと賭け事をするときに、マーリクは（ラクダの）内蔵のそばに控えていたが、（彼の取り分である）肉が（貧者らに）切り分けられるのに口出しするようなことはなかった。
 - 17- あなた（マーリク）の功績を見ると、私は耐え難くなる。私はあなたが亡くなった

2) baram はけちで食欲のあまりマイシルゲームにも加わず、他人が与えてくれるものを食べて生きている者。皮製のテントとは、マーリクが裕福であったことを暗示している。

3) kazza はものが言えないほどの苦痛を与え、怒りと悲しみに満たされるの意で、中傷合戦のことと思われる。〔校正者注：テキスト *našīra-ku* は訳「君の味方」に従い *našīra-ka* と読む。〕

4) *kanīf* は木を編んで作った、ラクダを寒さから守る囲い。この時期は水も食料も乏しくラクダのミルクも出なくなる。このようなときに、マーリクはよく人助けをしたことを暗示している。

5) ラクダをうならせるとテントの犬が鳴いて、旅人はテントのありかを知る。または、ラクダをうならせて相手に旅人が来たことを知らせる、のいずれかであろう。

あと、人々とのあらゆる絆が断ち切られたのに気づいた。

- 18- 私があなたの名を呼んでもあなたは答えない。かつては、あなたは（私が助けをもとめれば）たがわず直ちに応じてくれただろうに。
- 19- 我らは幸福な生活をしていた。だが、昔すでに、強大なキスラー（ペルシャ）王家もトゥッバア（ヒムヤル）王家も死に襲われた⁶⁾。
- 20- 我ら、すなわち、私とマーリクは長い間ともに暮らしてきたが、今生の別れとなった今は、まるで一夜をもともにしなかったかのようだ。
- 21- 私と（兄弟の）マーリクは長年、ジャジーマ王の二人の飲み友達のようなものであった。両者には離別なしと言われるほどの緊密な絆があったが（処刑された）⁷⁾。
- 22- もし、歳月が我ら兄弟を別れさせるのであれば（致し方ない）。兄弟マーリクは褒められて世を去ったのであるから。
- 23- 下層の雲間に雷光がきらめき、黒雲が雨を注いで洪水となって流れるとき⁸⁾、私はう、
- 24- “願わくば神よ、マーリクが眠る墓地に雨雲をもたらし、豊かに朝雨を恵み緑で覆いたまえ⁹⁾。
- 25- 両溪谷（アルワーディヤーニ）に長雨で洪水を起こさせ¹⁰⁾、柔らかな若芽を育て給え。
- 26- また、洪水をしてシャーリウ周辺の水溜りを覆いアルカルヤターニとダルファアの山地をうるわし給え¹¹⁾。”
- 27- 神に誓って言うが、私はこれらの土地が愛しいゆえに雨乞いするのではない。ただ、死に別れた愛しいマーリクのために雨乞いするのである。
- 28- 私からマーリクへの挨拶（は以上のとおりでである）。彼は、今や遠く離れ、土くれとなり、その上の土地は草木も無く荒れ果てている。
- 29- アルアムリーの娘（詩人の妻）が、“一体どうなされたのですか、かつては若々しく、心は柔和で黒髪がふさふさとしていましたのに、今はすっかりおやつれになり、変わり果てておいでですが”、と尋ねた。
- 30- 私は彼女に、そのように尋ねるのならと言って、“長いあいだの悲嘆のためだ、悲しみによる傷心は顔色を曇らすものだ”と答えた。

6) tubba°は No. 9, 41行の注参照。昔の王者さえ死は免れなかったとして、詩人は自らを慰めている。

7) この一行は多くの伝承では20行の前に置かれるべきものとされている。ジャジーマ（Jadhīma）はイラクのアルヒーラのラフム朝初代の王のことで、サーサーン朝創設者 Ardashīr Bābakān (A.D. 226-241) のころの人物。飲み友達二人とは、クダーア系の Balqayn b. Jasr 族の Fārij b. Ka°b の子にあたる2兄弟（マーリクとアキール）のこととされるが、一説では、子熊座のベータとガンマー星（al-Farqadāni）の綽名で呼ばれ、北極軸を回り離れることない二人のこととされているが本名は不詳。前者の伝承では、2兄弟はジンにさらわれた男の甥アムルを取り戻した功により王の飲み友達にされたが、後に処刑されたとのことである（『歌の書』14, pp.72-73）。

8) tarayya°a 水が集まって流れていく、即ち洪水となるの意。

9) アラブは墓に雨が注ぎ緑になるのを願うのを常としていた。

10) アルワーディヤーニ（al-Wādiyāni、両溪谷）は固有名詞と考えられる。サルマー（Salmā）周辺の山岳地にあった地名で、タイイ族の領域の最南端にあった。

11) Shāri°, al-Qaryatāni, Dalfa° はいずれも前行の周辺の地名であろう。

- 31- (私の) 母の子らは相次いで亡くなった。しかし、私は彼らが没した後、卑屈になったり、自らの品位を下げたりはしなかった。
- 32- 否、私は戦争を前にして一部の者が委縮し、尻込みするとき、大胆に前進するばかりであった。
- 33- 私を変えたのはわが一族(ヤルブーウ)のカイスとマーリクが、また、アルムシャッカルと一緒にいたアムルとジャズウが殺された事件である¹²⁾。
- 34- 私の飲み友達であった(従兄弟の)ヤジードが殺された事件があったが、出来ることなら家族と財産を犠牲にして、彼と楽しく暮らしたかったのだが。
- 35- そなたが私をからかっているのであれば(、教えてやろう)。確かに私は、家族を失って悲嘆している男を泣かせるような悲しみに見舞われた(が、他人の不幸を喜ぶようなまねをさせないために、耐え忍んでいるのだ)。
- 36- 私はたとえ運命に裏切られて不幸なめにあっても、親類縁者を膝を曲げて訪ね、助けを求めたりはしない。
- 37- 神の御名にかけてそなたに願うが、どうか、私に非難の言葉を聞かせず、また、私の心の傷のかさぶたをはがさないでほしい。さもなければ、再びその傷が痛むからである¹³⁾。
- 38- (そなたの非難の言葉は) 打ち切るがよい。私は現場にいたが、彼らの死を防ぐ手立が見出せなかったのだ¹⁴⁾。
- 39- いつの日か、福音に恵まれても私は喜ばないし、また、不幸に襲われ苦痛が加えられても、私はくじけない¹⁵⁾。
- 40- 仮に私が出会った悲運がムターリア山またはサルマー山¹⁶⁾の側面を襲ったなら、両山は屈辱のあまり崩壊するであろう。
- 41- 愛情深い三頭の乳母ラクダ¹⁷⁾が、子ラクダが(オオカミに)地面を引きずられ、食い殺されるという災難にあったときの悲しみさえ(、私の悲しみには及ばない)。

12) Qays と ‘Amr は詩人と同族(Yarbū‘ī)。マーリクは詩人の兄弟。アルムシャッカルはバハレーンにあった城砦。al-Aswad b. al-Mundhir が Yawm Uwāra の戦いで Jaz‘ b. Sa‘d Riyāhī とその一派を殺したのは、マーリクの処刑より20年ほど前のことである。

13) waji‘a の未完了形は yawja‘u となるが、ここではタミーム族の方言 yīja‘u の接続法の形が使用されている。アルアンバーリーによると、正則にかなっているのはヒジャーズ方言で、一部のカイス族は ya‘ja‘u とし、タミームは前期のとうりで最悪の方言である。コーランが下されたヒジャーズ方言が最善であると述べている。

14) アブー・ジャウファルの説明では、詩人はマーリク処刑の現場にいたが救出の手出しができなかったとしているが、ここで ‘an-hum (彼ら) は33-34行のアルムシャッカルで殺されたものたちをさすと考えられる。50行ではマーリクの死の知らせはアルムヒルが詩人の宿营地にもたらしたとなっており、詩人は処刑現場にいなかった。44行からもこのことが伺える。

15) 30-39行は詩人が妻 Ibnat l-‘Amr に返答した部分で、行の順序が入り乱れている。31, 36, 39, 32, 35, 33, 34, 37, 38 と並べるのが妥当である。

16) ムターリア (Mutāli‘) はバハレーンにある山。サルマーは25行の注10のとおり、タイイ族の山。いずれもタイイ族の山との説もある。

17) 母ラクダを失った子ラクダには、年老いて乳のあまり出なくなったラクダ2-3頭をあてがう。このような乳母ラクダは子ラクダをひどく可愛がるので、人間の愛情と比較される。アムル・ブヌ・クルスムのムアッラカ15行を参照。

- 42- 乳母ラクダは子を失って悲痛の念を抱いている雌ラクダに悲しみを思い出させ、一頭の雌ラクダが泣けば、他のラクダがこれに呼応して嘆き声をあげる。
- 43- 年老いた雌ラクダが立ち上がって殺された子ラクダを哀れみ、繰り返し泣いた。すると、その悲嘆がすべてのラクダ¹⁸⁾を泣かせた。
- 44- (このような乳母ラクダの悲しみとて) 死の伝え手がマーリクが死んだと告げた日の、私の悲しみには及ばない。彼ははっきりとした声で、永遠の別れを見届けて私に伝えた。
- 45- 君らの首領らのもとに、アルムヒッルの情報¹⁹⁾が届かなかったか。もし届いていれば、君たちのなかの心を痛めた者はすべて怒ったことだろう。
- 46- すなわち、死が突然マーリクを襲ったとき、彼はこれを喜び、現場で目撃しながら、何もしなかった(という情報である)。
- 47- お前(アルムヒッル)は着古した衣服を詰め物した座布団²⁰⁾(でマーリクの亡骸を覆い、枕を当ててやるの)を惜しんで、飛脚のように走りかえって彼の死を伝えたのか。
- 48- いつの日か、おまえ自身が楽しめない災難に見舞われるがよい。私は死は(すべての者に訪れ)勇者ぶる者²¹⁾(アルムヒッル)とて同じだと見ている。
- 49- いつの日か、お前にひどい災厄がふりかかるであろう。鼻や耳がそがれる姿にする者たちが手を下すであろう。
- 50- お前は(マーリクという)男の死を伝えてくれた。仮にお前の死体がマーリクのそばに横たわっていたなら、その死体が一塊であろうが、切り裂かれていようが、マーリクは丁重に扱ったであろう。
- 51- マーリクの処刑が中傷者らに楽しみを与えないように祈る。マーリクを憎んでいた者は無事に帰り、彼は(マーリクの亡骸を捨て置いて)別れた。

18) al-bark は千頭のラクダのことであるが、ここでは近くにうずくまっていたすべてのラクダのことであろう。

19) アルムヒッルは詩人と同じ Yarbūʿ族の子孫であるが、サアラブ家の者でアーリクとは対立していた。彼はマーリクの処刑に立ち会いながら彼の亡骸に衣をかけてやらず、他人の不幸をよろこんでいるかのように、死の知らせだけをした。2行のアルミンハールが亡骸に衣を着せたのとは異なり、冷淡な行動をしたと非難している。

20) al-sawiya は al-ḥawiya 「詰め物をした、ラクダの背に乘せるクッション」のこと。

21) tashajjaʿa 「勇者ぶる」とはアルムヒッルのことを皮肉った表現。

— (68) ムタンミン —

مُتَمِّم

まえがき

No. 67 と同じく、処刑された詩人の兄弟マーリクへの哀悼を主題とする詩である。詩人はマーリクのことを思い出して不眠、悲嘆を訴え、彼との離別に涙を流し、また、彼が気前よく客を惜しみなくもてなす人物であったとほめている。タウィール調、16行。

(68) テキスト

وَقَالَ مُتَمِّمٌ أَيْضًا

- ١١- أَرِفْتُ وَنَامَ الْأَخْلِيَاءُ وَهَاجَنِي
 ٢١- وَهَيَّجَ لِي حُزْنًا تَذَكَّرُ مَالِكِ
 ٣١- إِذَا عَبْرَةٌ وَرَعَتْهَا بَعْدَ عَبْرَةٍ
 ٤١- كَمَا فَاضَ عَرَبٌ بَيْنَ أَقْرَنٍ قَامَةٍ
 ٥١- جَدِيدُ الْكُلَى وَاهِي الْأَدِيمِ تُبَيِّنُهُ
 ٦١- لِذِكْرِي حَبِيبٍ بَعْدَ هَدْيٍ ذَكَرْتُهُ
 ٧١- إِذَا رَفَأَتْ عَيْنَايَ ذَكَرْنِي بِهِ
 ٨١- دَعَوْنَ هَدِيلاً فَاخْتَزَنْتُ لِمَالِكِ
 ٩١- كَأَنَّ لَمْ أَجَالِسُهُ، وَلَمْ أُمْسِ لَيْلَةً
 ١٠- فَتَى لَمْ يَعْشَ يَوْمًا بِدَمٍ وَلَمْ يَزَلْ
 ١١- لَهُ تَبِعٌ قَدْ يَعْلَمُ النَّاسُ أَنَّهُ
 ١٢- وَرَاحَتْ لِقَاحُ الْحَيِّ جُدْبًا تَسُوقُهَا
 ١٣- وَكَانَ إِذَا مَا الضَّيْفُ حَلَ بِمَالِكِ
 ١٤- لَعَمْرِي لَنِعَمَ الْمَرْءِ يَطْرُقُ ضَيْفُهُ
 ١٥- بَدُولٌ لِمَا فِي رَحْلِهِ غَيْرُ زُمَحٍ
 ١٦- إِذَا الشَّمْسُ أَضْحَتْ فِي السَّمَاءِ كَأَنَّهَا
- مَعَ اللَّيْلِ هَمٌّ فِي الْفُؤَادِ وَجِيعٌ
 فَمَا نِمْتُ إِلَّا وَالْفُؤَادُ مَرُوعٌ
 أَبْتُ وَاسْتَهَلْتُ عَبْرَةً وَدُمُوعٌ
 يُرَوِّى دِبَارًا مَأْوُهُ وَرُزُوعٌ
 عَنِ الْعَبْرِ زُورَاءُ الْمَقَامِ نَزُوعٌ
 وَقَدْ حَانَ مِنْ تَالِي النُّجُومِ طُلُوعٌ
 حَمَامٌ تَنَادَى فِي الْعُصُونِ وَفُوعٌ
 وَفَى الصَّدْرِ مِنْ وَجَدٍ عَلَيْهِ صُدُوعٌ
 أَرَاهُ، وَلَمْ يُصْبِحْ وَنَحْنُ جَمِيعٌ
 حَوَالِيهِ مِمَّنْ يَجْتَنِدِيهِ رُبُوعٌ
 عَلَى مَنْ يُدَانِي صَيِّفٌ وَرَبِيعٌ
 شَامِيَّةٌ تَزُورِي الْوُجُوهَ سَفُوعٌ
 تَضَمَّنَهُ جَارٌ أَشْمٌ مَنِيْعٌ
 إِذَا بَانَ مِنْ لَيْلِ التِّمَامِ هَزِيعٌ
 إِذَا أَبْرَزَ الْخُورَ الرِّوَائِعِ جُوعٌ
 مِنَ الْمَحَلِّ حُصٌّ قَدْ عَلَاهُ رُدُوعٌ

(68) 訳

- 1- 気楽な者たちは眠ったが、私は眠れなかった。夜が深まるにつれ心の中に悲しみがわきあがった。

- 2- マーリクのことを思い出すと悲しみが搔き立てられ、心が恐怖に打ちのめされ、眠れなかった。
- 3- 突然、一滴の涙が出ると、後の涙を抑えようとしたが、涙はこれを拒み、激しく音をたててとめどなく流れた。
- 4- まるで、井戸の滑車を吊るす二本の木の間の大きな皮バケツからあふれ出た水が、溝と作物に注いでいるかのようであった¹⁾。
- 5- 皮バケツの縁環には新しい皮でつぎがあてられており、(バケツ本体の) 皮には穴が多くあいている。加えて、浅い井戸の内壁は出っ張っていて、バケツは井戸の側面からずれ(てゆれ、水が流れ落ちる。このように涙が流れ)た。
- 6- 夜が更け行く中で愛する者(マーリク)のことがよみがえり、やがて、次の星が昇る時間が近ずいた²⁾。
- 7- 私の両目の涙が枯れると、小枝にとまっている鳩の鳴きあう声が聞こえ、再び彼のことを思い起こさせた。
- 8- 雌鳩たちが雄鳩(またわ小鳩)にこえをかけた。すると、私はマーリクを思い悲嘆に襲われ胸の中は彼への熱い思い出で苦痛にさいなまれた。
- 9- まるで、私はマーリクと同席したことも、夜をともにし、一緒に朝を迎えたこともなかったかのようだ³⁾。
- 10- 彼は一日たりとも非難されることなく生きた男であった。彼の周りには恩恵を求めて多くの者が彼の住まいに身を寄せた。
- 11- 彼に従う者は多く、おそらく人々はマーリクは近寄る者にとって夏と春の慈雨のような人物であったことを知るであろう。
- 12- 部族の乳ラクダたちが北風に追われ、空腹のまま夕方帰ってくるが、冷たい強風がラクダの顔に当たりこわばらせていた(このような時マーリクは人々を助けていた)。
- 13- マーリクのもとに客が来れば、強力で誇り高い保護者(であるマーリク)が彼の安全を保証するのである⁴⁾。
- 14- 私は命にかけて断言するが、冬の最も長い夜がひと時更けた頃客がおとずれるのに、彼はなんと良い男であったことか⁵⁾。
- 15- 飢餓が肌の白い女性らを日にさらすようなときに、彼は住まいにあるものを惜しみなく与えた。彼は吝嗇とは無縁の人物であった。
- 16- 即ち、空に昇る時の太陽は、あまりの寒さのため、まるでサフランのように真紅で、黄色い線が浮かんで見える(このような厳寒の食べ物の無いとき、彼は彼女らを助

1) ʾaqrun (単数 qarn 「角」) は滑車をつるす二本の木または両側壁のことで、その側壁に木を渡して滑車を固定した。qarnayni (二本の木) と双数にするところを複数で代用している。zurūʾu (作物) が主格となっているのは、作物はその水で潤されている、の意である。qāmat については回転ロープのついた滑車とか、滑車を支える交差した木などの諸説があるが、カイロ版の解説により滑車ととらえた。

2) tulūʾ は最後の星、朝の明星、太陽などの諸説があるが、夜の前半のひと時を表す hadʾ から推して次に昇る星と解した。

3) No. 67, 20 行でも、長年ともに暮らしてきたが今生の別れにおよび、まるで一夜もともにしなかったようだ、と同趣旨のことを述べている。

4) 上の句は wa-kāna ʾidhā l-jānī taʾammada mālikan (犯罪者がマーリクを頼ってくれば) とも言われており、この方が適当だと思われる。

5) layli t-timāmi には種々の意味があるが、カイロ版の解説に従い、冬の最も長い夜とした。

けた) 6)。

6) mahl は飢饉を表すが、それは同時に食物が欠乏する厳寒の季節でもある。huṣṣ (サフラン) は赤または黄色に染める染料植物 (wars 「ウコン、インドサフラン」) のこととされる。なお、この単語はブドウ酒の色を表すのにも用いられている: 「酒にお湯が混ぜられると、あたかもサフランが入っているように真紅に輝いている」 (アムル・ブヌ・クルスームのムアッラカ2行)。

—— (69) ハニーファ族の女 ——

まえがき

この詩は女流詩人の哀悼詩の片鱗を良くうかがわせる作品である。

彼女はハニーファ (Ḥanīfa) の族長ヤジード・ブヌ・アブド・アッラー・ブヌ・アムル (Yazīd b. ʿAbd Allāh b. ʿAmr) の死を悼んでいる。しかし、彼女が誰であったか全く分かっていない。

一般的に言って古代アラビアでは、死者への哀悼詩の多くは女性によって詠まれていたようで、優れた哀悼詩は女性の作が多く、葬儀にあたり死者を哀悼するのも女性の役割だったと考えられる。ワーフィル調、5行。

(69) テキスト

وَقَالَتِ أُمْرَأَةٌ مِنْ بَنِي حَنِيفَةَ

١١ - أَلَا هَلَكَ ابْنُ قُرَّانَ الْحَمِيدِ أَخُو الْجُلَى أَبُو عَمْرِو يَزِيدُ
 ٢١ - أَلَا هَلَكَ امْرُؤٌ هَلَكَتْ رِجَالُ فَلَمْ تُفَقَدْ، وَكَانَ لَهُ الْفُقُودُ
 ٣١ - أَلَا هَلَكَ امْرُؤٌ حَبَّاسٌ مَالٍ عَلَى الْعِلَاتِ مِتْلَافٌ مُفِيدُ
 ٤١ - أَلَا هَلَكَ امْرُؤٌ ظَلَّتْ عَلَيْهِ بِشِطِّ عُنَيْزَةٍ بَقَرٌ هُجُودُ
 ٥١ - سَمِعَنَ بِمَوْتِهِ فَظَلَّلَنَ نَوْحًا قِيَامًا مَا يُحِلُّ لَهُنَّ عُودُ

(69) 訳

- 1- ああ、賞賛に値するクッラーンの子、偉大な功績を残したアムルの父、ヤジードがみまかった。
- 2- ああ、一人の男が死んだ。多くの男は死んでも何も損なわれるものはないが、彼の死は大きな損失である¹⁾。
- 3- ああ、一人の男が死んだ。彼は苦楽いずれのときもテント近くにラクダを繋ぎ止めてよく費やし、よく与えた。
- 4- ああ、一人の男が死んだ。彼のためにウナイザ周辺で牝牛（のような女）たちが悲しみのために日がな眠らなかった²⁾。

1) 多くの男には業績がなく、死んだとて何の損害もない、との意。

2) カイロ版ではウナイザ (ʿUnayza) をアルバハラインの村としているが、おそらく誤りで、アッルンマ溪谷 (Wādī al-Rumma) にあった村であろう。shatt (岸边) の代わりに janb (側、周辺) との伝承もあり、これに従った。

- 5- 彼女らは彼の訃報を聞いて一日中立って泣き止まなかった。(あまりの悲しみゆえに) 香木をかぐことも許されなかった³⁾。

3) アルアスマイーは *nawḥan* は「向かい合って泣くこと」と説明しているが、カイロ版では「立ってなく女性」とあり、これに従った。

—— (70) ビシュル ——

بِشْرُ

まえがき

本名ビシュル・ブヌ・アムル・ブヌ・マルサド (Bishr b. °Amr b. Marthad)。この詩はアルアンバーリーのテキストでは5行となっているが、カイロ版では他の写本により、6行目を加えており、それによって訳した。この詩人の一族については、No. 45でとりあげたサアド・ブヌ・マーリク家の血統図のとおりで、親族のなかには、大、小のムラッキシュ、カミーア、タラファなどの詩人がおり、また、預言者ムハンマドと同時代の大詩人マイムーン・アルアァシャー (Maymūn al-°A°shā) もこの一族の血を引いている。

『歌の書』(8, p.79; 前記 al-°A°shā の項) によると、詩人はラフム朝最後の王アブー・カーブースに追われ、アルヤマーマにあった彼の部族の拠点にフライラ (Hurayra) とフライダ (Khulayda) という二人の qayna (歌姫) をつれて逃げ込んだ、とある。フライラについては、al-°A°shā が彼のムアッラカで誉めそやしている。

詩人はクラブ (Qulāb) というアサド族の土地でアサド族の男に殺された。これらのことから詩人は6世紀後半から7世紀初頭の人であった、といえる。

この詩は、有名なタグリブ族の族長でムアッラカ詩人であったアムル・ブヌ・クルスームと彼の仲間二人を嘲笑したものである。バシート調、6行。

(70) テキスト

وَقَالَ بِشْرُ بْنُ عَمْرِو بْنِ مَرْثَدٍ

- | | |
|---|---|
| أَبْشِرْ بِحَرْبٍ تُغْصُ الشَّيْخَ بِالرِّيقِ | ۱۱- قُلْ لِابْنِ كُلْثُومٍ السَّاعِي بِذِمَّتِهِ |
| إِذْ فُزَّتِ الْحَرْبُ عَنْ أَنْيَابِهَا الرُّوقِ | ۲۱- وَصَاحِبِيهِ فَلَا يَنْعَمُ صَبَاحُهُمَا |
| مِنْ الْمَعَالِي، وَقَوْمٌ بِالْمَفَارِيقِ | ۳۱- لَا يَبْعَثُ الْعَيْرَ إِلَّا غِبَّ صَادِقَةٍ |
| لَهَا تَوَالٍ وَحَادٍ غَيْرُ مَسْبُوقِ | ۴۱- بَلْ هَلْ تَرَى طُعْنًا تُحْدِي مُقَقِّعَةً |
| لِرَهْوِهِ مِنْ أَعَالَى الْبُسْرِ زُخْلُوقِ | ۵۱- يَأْخُذْنَ مِنْ مُعْظَمٍ فَجًّا بِمُسْهَلَةٍ |
| إِذْ أَصْبَحَ الدِّينُ دِينًا غَيْرَ مَوْثُوقِ | ۶۱- حَارَبْنَ فِيهَا مَعَدًّا وَاعْتَصَمْنَ بِهَا |

(70) 訳

- 1- クルスームの倅、すなわち、防衛義務を果たすのに努める男に告げよ：“戦争は経験

- 豊かな老人をさえ唾で窒息させるものだ”と、私は良い知らせを伝えてやる、と¹⁾。
- 2- また、同じ事を彼の二人の仲間にも告げよ：“戦争がその長い牙をあらわにするとき、良い朝を迎えないように”、と²⁾。
- 3- 彼は輝かしい武勲をあげる確かな見込みがつくまでたじろぎ、思い悩み隊商を送らず、部下たちは十字路に散在したままである³⁾。
- 4- 否、君に見えるか、婦人を乗せたラクダが連なって先導されて行くのを。彼女らには後に続く者や他の者に追い越されない御者がついていたか⁴⁾。
- 5- 彼女らはムウザム（または、本道）からそれて、山路をたどった。完熟したナツメヤシの実の表面の黄色や赤色の模様の滑らかな衣が乗り籠を覆っていた⁵⁾。
- 6- (攻撃命令が) 信頼出来ず服されなくなったとき、彼女らはラクダの乗り籠の中でマアッドとの戦いで身を守ろうとした⁶⁾。

1) クルスームの倅とはムアッラカ詩人アムル・ブヌ・クルスームのことで、風刺的表現とされる。

2) 仲間二人が誰と誰か不明である。なお、襲撃は早朝行われるのが常で、*‘im ṣabāḥan*（良い朝、お早う）がその挨拶。

3) 軍隊のことを、*‘ir*（ラクダの隊商）と呼んで蔑んでいる。

4) 敵軍をラクダの籠に乗った婦人の行列として嘲笑していると思われる。

5) これも敵軍を婦人になぞらえ、堂々と本道を進まず、こそこそと山道に入り、戦意がないことをあざけている。ムウザム (*muṣṣam*) は地名かもしれない。

6) 3行でアムルの軍は戦う用意の無い隊商だとし、4行で戦士をラクダ籠に乗った婦人になぞらえ、5行で相手を避けて山路に入り、6行で服従しない婦人がラクダ籠の中で身を守るとし、全体としてアムル軍を軽蔑している。

— (71) ビシュル —

بِشْرُ

まえがき

アルマルズーキーによれば、アルアスマイーはこの詩の作者はフジュル・ブヌ・ハーリド・アルマルサディー (Hujr b. Khālid al-Marṭhādī) だとしている。アブー・タンマームはハマーサ詩集にフジュルの詩を4篇載せている。そのなかには、ラフム朝のアンヌウマーン・ブヌ・アルムンジル王への賞賛詩が含まれている。ビシュルは彼の伯父で、2世代前の人である。詩の内容は、ある部族の寛容さや自部族の自慢となっているが、省略されている部分があるらしく、また、行の順序が乱れたのか、前後の関係が不明な箇所もある。なお、3行目と11-15行目まではカイロ版により追加した。カーミル調、15行。

(71) テキスト

وَقَالَ بِشْرٌ أَيْضًا

- ١١- أَبْلُغْ لَدَيْكَ أَبَا خُلَيْدٍ وَإِلَّا
 ٢١- أَلَّا ابْنَ جَعْدَةَ بِالْبُؤَيْنِ مُعَزَّبٌ
 ٣١- فَأَنْفُتُ مِمَّا قَدْ رَأَيْتُ وَسَاءَ نَبِي
 ٤١- وَلَقَدْ أَرَى حَيًّا هُنَالِكَ غَيْرَهُمْ
 ٥١- لَا أَسْتَكِينُ مِنَ الْمَخَافَةِ فِيهِمْ
 ٦١- وَإِذَا هُمْ لَعَبُوا عَلَى أَخْيَانِهِمْ
 ٧١- وَتَبَيْتُ دَاجِنَةً تُجَاوِبُ مِثْلَهَا
 ٨١- فِي إِخْوَةٍ جَمَعُوا نَدَى وَسَمَاحَةً
 ٩١- وَتَرَى جِيَادَ ثِيَابِهِمْ مَخْلُولَةً
 ١٠- عَمَرُو بَنَ مَرْتِدٍ الْكَرِيمِ فَعَالُهُ
 ١١- وَتَرَاهُمْ يَعْشَى الرَّفِيفُ جُلُودَهُمْ
 ١٢- عَلَبَتْ سَمَاحَتُهُمْ وَكَثُرَتْ مَالِهِمْ
 ١٣- وَتَرَى الَّذِي يَعْفُوهُمْ لِحَبَائِهِمْ
 ١٤- أَدْمَاءَ مُفْكِهِةً وَفَحْلًا بَارِزًا
 ١٥- أَوْ قَارِحًا مِثْلَ الْقَنَاقَةِ طِمْرَةً
- أَنِّي رَأَيْتُ الْيَوْمَ شَيْئًا مُعْجَبًا
 وَبَنُو خَفَاجَةَ يَقْتَرُونَ الثَّعْلَبَا
 وَعَظِيبْتُ لَوْ أَنِّي أَرَى لِي مَعْضَبَا
 مِمَّنْ يَحْلُونَ الْأَمِيلَ الْمُعْشَبَا
 وَإِذَا هُمْ شَرِبُوا دُعِيْتُ لِأَشْرَبَا
 لَمْ أَنْصَرِفْ لِأَيَّتٍ حَتَّى أَلْعَبَا
 حَوْدًا مُنَعَّمَةً وَتَضَرَّبُ مُعْتَبَا
 هُضِمَ إِذَا أَرَمُ الشِّتَاءِ تَرَعَبَا
 وَالْمَشْرِفِيَّةُ قَدْ كَسَوَهَا الْمَذْهَبَا
 وَبَنُوهُ، كَانَ هُوَ النَّحِيبُ فَالْجَبَا
 طَنِزِينَ يُسَقِّونَ الرَّحِيقَ الْأَصْهَبَا
 لَزَبَاتٍ دَهْرٍ السَّوْءِ حَتَّى تَذْهَبَا
 يُحْبَى وَيَرْجُو مِنْهُمْ أَنْ يَرْكَبَا
 أَوْ قَارِحًا مِثْلَ الْهَرَاوَةِ سَرْحَبَا
 شَوْهَاءَ تَعْتَبُ الْمِدْلَ الْأَخْفَبَا

(71) 訳

- 1- お前の家のフライドの父ワイルに「私は今日驚くべきものを見た」と伝えよ¹⁾。
- 2- すなわち、ジャアダの息子はラクダをアルブワインという遠くの牧草地に送り、ハファージャの息子たちは一匹の狐を捕えようとして追っていったのだ²⁾。
- 3- 私はこの光景に嫌気が差した。それは私の気分を害した。しかし、立腹すべきよりどころが見つからなかった。
- 4- 私は牧草が豊かなアルアミールの地に住んでいた者たちの中に、彼ら以外の部族を見ることもあった³⁾。
- 5- 彼らの中で私はへりくだることは無い。すなわち、彼らが酒盛りするときには、私は招かれて（彼らの一緒に）飲む⁴⁾。
- 6- 彼らが時を決めてゲームをするときには、私は夜を過ごすためにと立ち去らず、ゲームに加わった。
- 7- 歌姫が夜どうし他の歌姫とかわるがわる歌う。相手の歌姫も若くて美しく安楽な育ちで、人々を満足させるウードを掻き鳴らす。
- 8- 兄弟のなかにあって、彼らは寛大さと気前よさを併せ持ち、冬の飢餓が広がる時には、財産をなげうって人々を救った。
- 9- 君は彼らが着ている上等の衣服はほころんでいるが、アルマシュラフィーヤ剣は黄金で飾られているのを見るであろう⁵⁾。
- 10- アムル・ブヌ・マルサドはその行いのすべてにおいて高貴である。その息子たちは、彼が高貴な生まれで生んだ高潔な子らである⁶⁾。
- 11- 君は彼らの皮膚を汗が覆っているのを見るだろう。彼らは冗談をあざけ笑い、赤味がかった最良のブドウ酒が振舞われる。
- 12- 彼らの寛大さと財産の多さは、悪運がもたらす災難に打ち勝ち、災難は消滅してしまうだろう。
- 13- 君は彼らに贈り物を求める者には、それが与えられるのを見るだろう。その上、乗り物までも贈られる望みがある。
- 14- すなわち、ミルクを良く出す立派な雌ラクダか、9歳に達した雄馬か、長身で歯が出そろう杖のようによく引き締まった雌の5歳馬か、が与えられるだろう。
- 15- または、槍のように細身の、飛び跳ねようと奮い立つ雌馬が与えられるかもしれない。この馬は美しく臀部に白い斑がついていて、体力、走力に優れた野生のロバを

1) フライドの父 (Abū Khulayd) すなわち Wā'il b. Shurahbīl b. Marthad のことで、詩人の兄弟。

2) 詩人が驚くべきことと言っているのは、Banū Khafāja という名門の人々が、運命のいたずらにより落ちぶれ飢餓に襲われ狐を狩るようになったのに引き換え、小部族であった Banū Ja'da はラクダを遠隔地まで送るほどに成り上がったことをさす。これら両部族はいずれもラビーア系のアーミル・ブヌ・サアサアの支族で、詩人が属するカイス・ブヌ・サアラバの居住地に隣接するアルヤマーマ南部に住んでいた。

3) 「彼ら以外の部族」が何部族か不明。

4) 彼らが何部族か不明である。ただ、詩人の部族でないことは明らかである。おそらく2行にあるハファージャ (Khafāja) のことであろう。

5) 彼らは衣服や食べ物については無頓着で、もっぱら武器に気を配っていた。アルマシュラフィーヤ剣については No. 12, 10行を参照。

6) アムル・ブヌ・マルサドは詩人の父のことで、ここから詩人は彼の一族を自慢している。

狩ることができる⁷⁾。

7) shawhā には種々の意味がある。ʾashwah の女性単数形で「醜い、美しい、不運、凶眼、顎が張っている」など多義にわたる。ここでは前後の関係から美しいと訳した。

— (72) アブド・アルマシーフ・ブヌ・アサラ —

عَبْدُ الْمَسِيحِ بْنِ عَسَلَةَ

まえがき

本名はアブド・アルマシーフ・ブヌ・ハキーム・ブヌ・アフィール (°Abd al-Masīḥ b. Ḥakīm b. °Afīr)。アブド・アルマシーフ (メシヤの奴) という名前からみて、おそらく、この詩人はキリスト教徒であったと思われる。アサラ (°Asala) は彼の母の名である。

彼の5代前の祖先にあたるムッラ・ブヌ・ハンマーム・ブヌ・ムッラによる詩は本詩集 No. 82 に組み込まれている。

アブド・アルマシーフはバクル・ブヌ・ワーイル系の勇族シャイバーンに属し、メソポタミヤに勢力を張っていた。この詩は同じくメソポタミヤにいたバクル・ブヌ・ワーイル系の別部族であったアンナミル・ブヌ・カーシト (al-Namir b. Qāsiṭ) 族のカアブという男が酒宴で飲み過ごし、愚行に及んだのを中傷したものであるが、読まれた年代は不明である。カーミル調、8行。

(72) テキスト

وَقَالَ عَبْدُ الْمَسِيحِ بْنِ عَسَلَةَ

- | | | | | | |
|------|---|----------------|--------------|------------|-----------|
| ۱۱ - | يَا كَعْبُ إِنَّكَ لَوْ قَصَرْتَ عَلَى | حُسْنِ | الْبَدَامِ | وَقَلَّةِ | الْجُرْمِ |
| ۲۱ - | وَسَمَاعٍ مُدْجِنَةٍ تُعَلِّلُنَا | حَتَّى | نُؤَوِّبَ | تَنَاوَمَ | الْعُجْمِ |
| ۳۱ - | لَصَحَوْتُ وَالْتَمَرْتُ يَحْسِبُهَا | عَمَّ | السَّمَاءِ | وَحَالَةَ | النَّجْمِ |
| ۴۱ - | هَلْهَلْتُ لِكَعْبٍ بَعْدَ مَا وَقَعْتُ | فَوْقَ | الْجَبِينِ | بِمَعْصَمِ | فَعَمِ |
| ۵۱ - | جَسَدٌ بِهِ نَضْحُ الدِّمَاءِ كَمَا | فَنَأْتُ | أَنَاْمِلُ | قَاطِفِ | الْكَرَمِ |
| ۶۱ - | وَالْحَمْرُ لَيْسَتْ مِنْ أَحْيَاكَ وَلَـ | كِنْ | قَدْ تَحُونُ | بِأَمِنْ | الْحِلْمِ |
| ۷۱ - | وَتُبَيِّنُ الرَّأْيَ السَّفِيهَ إِذَا | جَعَلْتُ | رِيَاخَ | شَمُولَهَا | تَنْمِي |
| ۸۱ - | وَأَنَا امْرُؤٌ مِنْ آلِ مُرَّةٍ إِنْ | أَكَلِمْتُكُمْ | لَا | تُرْفَعُوا | كَلْمِي |

(72) 訳

- 1- おお、カアブよ。お前が自制して飲み友達と和やかに付き合い、かれらの気分を壊さなければ良いのだが。
- 2- 曇天の日に我々を楽しませてくれる歌姫の歌を聞いて、ペルシャの王たちが眠りに

- ついたように、家に帰って休みたいものだ¹⁾。
- 3- お前がしらふであったなら、ナミル族の男（であるお前）は、歌姫を乙女座の角星の伯父かその星の叔母のように（美しいと）思ったことであろう²⁾。
- 4- 控えよ、カアブ、歌姫がふくよかな手首（腕輪）をお前の前の額に当てたからとはいえ（手出しするな）。
- 5-（額に傷がつき）血がにじみ出て赤黒く乾いたが、まるで、ブドウを摘む者の指先が赤く染まっているようだった。
- 6- ブドウ酒は決してお前の兄弟ではない。むしろ、分別ありと信じている者を裏切ることもある。
- 7- ブドウ酒の酔いが深まれば（良い気分になって）、馬鹿げた考えも立派だと思ってしまう³⁾。
- 8- 私はムッラー門の男だ。もし私がお前たちを風刺して傷つければ、傷から出る血はお前たちには止められないだろう⁴⁾。

1) mudjina は dājina のことで、タラファのムアッラカ59行にもあるとおり、曇天の日、野外での活動が出来ないときにテントで楽しむ歌姫を指す。tanāwuma を tanā'uma (< 語根 n-ʾ-m「うなる」) と取り、「雄鶏の鳴き声」との解説もある。しかし、アルアスマイーが、ペルシャ人は眠る時や目覚めるときに、楽しい音楽を聴いて気楽に眠り、あるいは、目覚めるのが習慣となっていたと説いており、これに従った。

2) 歌姫が彼の方に進み出て、誤って腕輪が彼の額に当たって傷をつけてしまった。彼は怒って彼女を平手で叩いた。

3) tubayyinu の意味は、アブー・ジャアファルが伝える tujayyinu「立派に見せる」によった。

4) 風刺詩が人々に伝えられ断ち切ることが出来なくなることを、止血の難しさにたとえている。これは、カアブが詩人に仕返しをすれば致命的な打撃を与える風刺詩を流布させるぞ、と脅した文句。

— (73) アブド・アルマシーフ・ブヌ・アサラ —

عَبْدُ الْمَسِيحِ بْنِ عَسَلَةَ

まえがき

この詩は、夜明け前に遠隔地の草原に駿馬を駆って狩に出た模様を詠んだものである。バシート調、5行。

(73) テキスト

وَقَالَ عَبْدُ الْمَسِيحِ بْنِ عَسَلَةَ أَيْضًا

- | | | |
|------|---|--|
| ١١ - | وَعَارِبٍ قَدْ عَلَا التَّهْوِيلُ جَنْبَتَهُ | لَا تَنْفَعُ النَّعْلُ فِي رُقَارِقِهِ الْحَافِي |
| ٢١ - | صَبَّحْتُهُ صَاحِبًا كَالسَّيِّدِ مُعْتَدِلًا | كَأَنَّ جُؤْجُؤَهُ مَدَاكُ أَصْدَافِ |
| ٣١ - | بَاكَرْتُهُ قَبْلَ أَنْ تَلْعَى عَصَافِرُهُ | مُسْتَحْفِيًا صَاحِبِي وَعَيْرُهُ الْحَافِي |
| ٤١ - | لَا يَنْفَعُ الْوَحْشَ مِنْهُ أَنْ تَحْدَرُهُ | كَأَنَّهُ مُعْلَقٌ مِنْهَا بِحُطَافِ |
| ٥١ - | إِذَا أَوَاضِعُ مِنْهُ مَرَّ مُنْتَحِيًا | مَرَّ الْأَتْيِ عَلَيَّ بِرَدِيهِ الطَّافِي |

(73) 訳

- 1- しばしば遠くの草原に行ったが、そこには多彩な花がすぐ伸びる草の上に咲き誇っており、輝く露の中ではサンダルも役立たず素足同然だ¹⁾。
- 2- 私は（夜のうちに出発し）早朝その草原にオオカミのように活発な友（すなわち愛馬）とともにいった。馬の胸はまるで、真珠貝を砕く石のように黄色であった（馬の胸は花粉で染まり、まるで真珠貝を砕く石のように黄色になっていた）²⁾。
- 3- 私はその草原に小鳥たちが鳴き始める前に朝早く行って、相棒の馬を獲物にきづかれないよう、（背の高い草の中に）隠そうとしたが、他の馬は隠せても（私の馬は背が高く）隠せなかった。
- 4- しかし、たとえ野獣が警戒したとしてもこの馬からは逃れられない。あたかもこの馬は、獲物の上に垂れている鉄かぎのようなものであるかのようだ。
- 5- 私がこの馬を静めようとすると、（馬は獲物に向かって）押し分けて突進する。まるで、洪水が行く手のパピルスに向かって流れるような勢いである。

1) wāw は wāw rubba.

2) madāk は香料を砕く石、解説ではこの馬は栗毛（kumayt）だとある。その理由として、胸が黄色いことをあげている。しかし、花粉がついて黄色になった可能性もある。

— (74) サアラバ・ブヌ・アムル —

ثُعْلَبَةُ بْنُ عَمْرٍو

まえがき

この詩人については、すでに No. 61 で紹介した。この詩では、廃墟の描写、次いで、馬を取り上げ、武器に触れ、死を恐れない自己の勇気を誇っており、いわゆる自賛 (fakhr) を主題とした作品である。3, 11, 12, 13 の4行はカイロ版により追加した。タウィール調、16行。

(74) テキスト

وَقَالَ ثُعْلَبَةُ بْنُ عَمْرٍو الْعَبْدِيُّ

- | | | |
|--|--|------|
| قَفَّارٌ خَلَا مِنْهَا الْكَثِيبُ فَوَاحِفُ | لِمَنْ دَمْنٌ كَأَنَّهُنَّ صَحَائِفُ | - ١١ |
| تَلَعَّبَ بِالسَّمَانِ فِيهَا الرَّحَافُ | فَمَا أَحْدَثَتْ فِيهَا الْعُهُودُ كَأَنَّمَا | - ٢١ |
| يُقِيمُ يَدِيهِ تَارَةً وَيُخَالِفُ | أَكْبَ عَلَيَّهَا كَاتِبٌ بِدَوَاتِهِ | - ٣١ |
| وَيَرْفَعُ عَيْنِيهِ عَنِ الصَّنْعِ طَارِفُ | رَجَا صُنْعُهُ مَا كَانَ يَصْنَعُ سَاجِيًا | - ٤١ |
| فَقَاطَتْ وَفِيهَا بِالْوَلِيدِ تَقَادُفُ | وَشَوْهَاءَ لَمْ تُوشَمْ يَدَاهَا وَلَمْ تُدَلْ | - ٥١ |
| وَإِخْضَارَ طَبِيٍّ أَخْطَأَتْهُ الْمَجَادِفُ | وَتُعْطِيكَ قَبْلَ السَّوْطِ مِلءَ عِنَانِهَا | - ٦١ |
| يَحُبُّ بِهِ فِي الْحَيِّ أَوْرُقَ شَارِفُ | بَلَلْتُ بِهَا يَوْمَ الصُّرَاخِ، وَبَعْضُهُمْ | - ٧١ |
| شَايِبٌ غَيْثٌ يَحْفَشُ الْأُكْمَ صَائِفُ | بِبَيْضَاءَ مِثْلَ النَّهْيِ رِيحٌ وَمَدَّهُ | - ٨١ |
| وَيَمْضِي وَلَا يَنَادُ فِيمَا يُصَادِفُ | وَمُطَرِدٌ يُرْضِيكَ عِنْدَ ذَوَاقِهِ | - ٩١ |
| وَأَبْيَضُ قَصَالُ الضَّرْبَةِ جَائِفُ | وَصَفْرَاءُ مِنْ تَبَعِ سِلَاحٍ أُعِدَّهَا | - ١٠ |
| وَلَا هُوَ عَمَّا يَقْدِرُ اللَّهُ صَارِفُ | عَتَادُ امْرِئٍ فِي الْحَرْبِ لَا وَاهِنُ الْقُوَى | - ١١ |
| نَوَاجِدُهَا وَاحْمَرَّ مِنْهَا الطَّوَائِفُ | بِهِ أَشْهَدُ الْحَرْبِ الْعَوَانَ إِذَا بَدَتْ | - ١٢ |
| مِنَ الْمَوْتِ لَا يَنْجُو وَلَا الْمَوْتُ جَانِفُ | قِتَالِ امْرِئٍ قَدْ أَيَقَنَ الدَّهْرُ أَنَّهُ | - ١٣ |
| أَرَا حَيْلُ أَحْبُوشٍ وَأَسْوَدُ آلِفُ | وَلَوْ كُنْتُ فِي عُمْدَانٍ يَخْرُسُ بَابُهُ | - ١٤ |
| يَحُبُّ بِهَا هَادٍ لِإِثْرِي قَائِفُ | إِذَا لَا تَتَنَبَّى، حَيْثُ كُنْتُ، مَنِيَّتِي | - ١٥ |
| وَأَيُّهُ أَرْضٍ لَيْسَ فِيهَا مَتَالِفُ | أَمِنْ حَذَرٍ آتَى الْمَهَالِكِ سَادِرًا | - ١٦ |

(74) 訳

- 1- 文字が記された羊皮紙のような模様をていする廢墟はそも誰のものか。そこは荒れ果てており、アルカシーブとワーヒフには人影もない¹⁾。
- 2- 相次ぐ雨が(廢墟の跡地を)洗い流し、塗料でいたずらをしたように地面に明るい飾り模様が描かれている。
- 3- 書き手が地面にインクつぼをもって腹ばいになり、まず、直線を引き、次に、曲線を描いたようだ²⁾。
- 4- 彼は書き仕事をしている間は作品をじっと見つめていたが、やがて、目をあげて作品からそらした³⁾。
- 5- (私は) 多くの見事な雌馬を持っていた。それらは(病気のため)前足に焼きごてを当てられたことも、卑しい仕事につかされることもなく、夏の暑い頃には奴隷を乗せて駆け回る⁴⁾。
- 6- 馬は君が鞭で打つ前に全速力で駆け出し、射手が射損ねて逃げるガゼルのような速さで疾駆する。
- 7- 助けを求める叫び声が聞こえ、これに応じようとする日、私はこのような馬を入手していたが、他の者は灰色の老いぼれたラクダ⁵⁾に乗って部族の中をゆっくり歩いていた。
- 8- 私は白く輝くくさび帷子で身を固めていたが、それは夏に丘を削るほどの夕立で水かさを増した池に風が当たり、さざ波立った水面のようであった⁶⁾。
- 9- (私は) 滑らかでほどよい長さの槍を持っているが、それを試してみれば、立派さに君は満足するであろう。出会いがしらの(敵を)刺しても曲がることはない⁷⁾。
- 10- (私は) ナブウの木で作られた黄色の弓を持っている。これらが私が備えている武器であるが、加えて白く光った刃の剣があり、これは、相手を良く切り、腹部を裂く(鋭利なもの)。
- 11- 無力ではなく、また、神が定めた運命から逃げ出さない男の武器とはこのようなものだ。
- 12- 私はこれらの武器でもって、戦争が奥歯をむき出し、手足を赤く染めるとき、度重なる戦いに臨んだ⁸⁾。
- 13- 私は、死からは逃れられない、また、死も放置しないという運命を、良くわきまえた男が戦うように戦闘に突入した。
- 14- たとえ、私がアビシニアの歩兵と土地になじんだ毒蛇が城門を守る、 Gumdān 城の中にいても⁹⁾、

1) アルカシーブ (al-Kathīb) はアルバハレーンの村。詩人が属したアブド・アルカイスの土地、ワーフィフ (Wāḥif) は不明であるが、おそらく近くの土地であろう。

2) 詩人には文字や書物に触れる機会が多くあったであろう。しかし、第三者的な述べ方からして、読み書きができたとは思えない。

3) rajā「望む」では意味が曖昧である。ranā「じっと眺める」の写し間違えかも知れぬ。

4) shawhā<ʾashwah は多義であるが、「気性のすぐれた見事な雌馬」という解説に従う。

5) ʾawraqū「灰色のラクダ」は最も卑しいとされ、救援の役に立たないと言われている。

6) 刀や鎧の輝きはしばしば水かさが増した小川や池の水面のそれになぞらえられる。

7) muṭṭarid 槍の異名として No. 17, 50行でも用いられている。

8) ṭawāʾif は nawāḥī「あたり、周辺」と解説にあるが、レインの辞書により「手足」と訳した。

9) アルヤマンのアビシニア軍が守る Gumdān (Ghumdān) 城はテントに住むアラブに強い印象

- 15- どこにいても、死は私をきっと見舞うであろう。あとをつける案内人が死を伴って私の足跡を辿り、急ぎ訪れるであろう。
- 16- 私が危険な場所に警戒のあまり、途方にくれて訪れるであろうか。否、滅亡の危険が無い土地など断じてない¹⁰⁾。

を与えていた (No. 9, 41行の注を参照)。この文句から見ると、この詩人の時代ヒムヤル王サイフ・ブヌ・ジー・ヤザン (Sayf b. dhī Yazan) とペルシャの將軍ワフリズ (Wahriz) 連合軍はまだアルヤマンを奪回していなかったことを暗示している。奪回したのは570-579年頃とされている。579年には遠征軍をアルヤマンに送ったアヌーシルワーンが没している。

10) 彼は用心深いと批判する者に対する非難。

—— (75) アブー・カイス・ブヌ・アルアスラト・アルアンサーリー ——

أَبُو قَيْسِ بْنِ الْأَسْلَتِ الْأَنْصَارِيِّ

まえがき

本名サイフィー・ブヌ・アーミル・ブヌ・ジャシュム (Ṣayfī b. ʿĀmir b. Jashm)。父のアーミルの通称がアルアスラトであったので、詩人の通称にこれが用いられている。

預言者ムハンマドがヤスリブに622年に移住 (hijra) したのは同地のアルアウスとアルハズラジュ両部族が対立して紛争を繰り返し、調停者が必要であったからだと言われている。預言者が移住した後にイスラーム共同体が生まれ、ヤスリブは Madīnatu n-Nabī (預言者の町) となった。預言者没後、跡を継いだ最初の3人のカリフは、ここを本拠としてイスラームの大征服事業を指導した。この間、前記両部族はアンサール (anṣār 「援助者」) として征服事業に参加した。

この詩は預言者が調停者として招かれる前の両部族の争いの一局面を詠んだものである。両部族は、最後の戦い、すなわち、ブアース (Buʿāth) の戦いで互いに消耗して預言者を調停者として迎えたが、この詩はそれ以前の両部族によるハーティブ (Hāṭib) の戦いに言及したものである。(ただし、『歌の書』(17, p.161) はブアースの戦いとしているが、Lyll 校訂本ではハーティブの戦いとしている。) ハーティブの戦いの経緯は、概略、以下のとおり。

ズブヤーン族のバヌー・サアラバ・ブヌ・サアド (Banū Thaʿlaba b. Saʿd) 出身のある男が、アウス族の名門でハーティブ・ブヌ・カイス (Hāṭib b. Qays) を家長とするムアーウィヤ家の庇護民であった。彼はある日、ヤスリブのバヌー・カイスカーウ (Banū Qaynuqāʾ) の市場に買い物に出かけた。ハズラジ族のヤジード・ブヌ・アルハーリス (Yazīd b. al-Hārith、母の名はフシュム Fushum であったので彼はイブン・フシュム Ibn Fushum 「フシュムの倅」と呼ばれていた) が、ムアーウィヤ家の庇護民が市場に来ているのに気づいて、あるユダヤ人に、あの男を平手打ちにしたら外衣をやると約束した。そのユダヤ人は言われたとおり、その男を平手で打って、外衣をもらった。ところが、平手打ちした音は市場にいた者たちに聞こえるほどで、叩かれた男は「ハーティブ家の衆、助けてー」と叫んだ。これを聞いてハーティブが現れ、叩いた男を確かめ、件のユダヤ人の頭蓋骨を刀で裂いた。イブン・フシャームはこの知らせを受けると現場に駆けつけたが、ハーティブは家に引き上げてしまっていたので、代わりに、居合わせたムアーウィヤ家の別の男を殺した。これが引き金となって兄弟部族とされたアウスとハズラジ両部族の抗争が拡大し、全面的な戦争になった。

詩人アブー・カイス・ブヌ・アルアスラトは、この戦いでアウス族の司令官であった。両部族の抗争はブアースの戦いで終止符を打つが、詩人は最後まで指揮を執った。

ハーティブの戦いではアウスは苦境に立たされるが、ブアースの戦いでは勝利し、ハズラジに大きな損害を与えたことになっている。

詩人は長い間、戦争のため家を空けていた。戦いが終わり、家に帰ってドアをノックすると妻のカブシャ・ビント・ダミラ (Kabsha bint Damira) が変わり果てた夫を夫と思わず、避けようとした。

そこで彼は、彼女の名を口にした。その声を聞いて彼女は初めて夫だと気づいた。このように、この詩は彼女に戦争における苦難を語るところから始まり、鎧、刀、盾などの武器について語り、一族の盛んな武威、自己の勇気を誇っている。

アブー・カイスはイスラームに改宗するつもりであったらしいが、改宗する前に没したようである。彼の没年は不明である。彼の息子のウクバ (Uqba) はイスラームに帰依し、A.H. 15 (A.D. 636) 年のカーディシーヤの戦いでカリフ軍に加わり戦死している。サリーウ調、24行。

(75) テキスト

وَقَالَ أَبُو قَيْسٍ بْنُ الْأَسْلَتِ الْأَنْصَارِيُّ

- | | |
|---|--------------------------------------|
| ۱۱ - قَالَتْ، وَمَ تَقْصِدُ لِقِيلِ الْخَنَا | مَهْلًا فَقَدْ أَبْلَغْتَ إِسْمَاعِي |
| ۲۱ - أَنْكَرْتِهِ: حِينَ تَوَسَّمْتِهِ | وَالْحَرْبُ غَوْلٌ ذَاتُ أَوْجَاعِ |
| ۳۱ - مَنْ يَذُقُ الْحَرْبَ يَجِدُ طَعْمَهَا | مُرًّا، وَتَحْسِنُهُ بِيَجْعَجَاعِ |
| ۴۱ - قَدْ حَصَّتِ الْبَيْضَةُ رَأْسِي فَمَا | أَطْعُمُ غُمُضًا غَيْرَ تَهْجَاعِ |
| ۵۱ - أَسْعَى عَلَى جُلٍّ بَنَى مَالِكِ | كُلُّ امْرِئٍ فِي شَأْنِهِ سَاعِ |
| ۶۱ - أَعْدَدْتُ لِلْأَعْدَاءِ مَوْضُونََةً | فَضْفَاضَةً كَالنَّهْيِ بِالْقَاعِ |
| ۷۱ - أَحْفِرُهَا عَنِّي بِذِي رَوْقِي | مُهَنْدٍ كَالْمِلْحِ قَطَاعِ |
| ۸۱ - صَدَقَ حُسَامٍ وَادِقٍ حَدُّهُ | وَمُجَنَاءٍ أَسْمَرَ قَرَاعِ |
| ۹۱ - بُرِّ امْرِئٍ مُسْتَبْسِلٍ حَاذِرٍ | لِلدَّهْرِ، جَلْدٌ غَيْرَ مِجْزَاعِ |
| ۱۰ - الْحَزْمُ وَالْقُوَّةُ خَيْرٌ مِنْ أَلِ | إِدْهَانٍ وَالْفَكَّةُ وَالْهَاعِ |
| ۱۱ - لَيْسَ قَطًّا مِثْلَ قُطَيٍّ وَلَا أَلِ | مَرْعَى فِي الْأَقْوَامِ كَالرَّاعِي |
| ۱۲ - لَا نَأْمُ الْقَتْلَ وَنَجْزِي بِهِ أَلِ | أَعْدَاءَ كَيْلِ الصَّاعِ بِالصَّاعِ |
| ۱۳ - نَدُوهُمْ عَنَّا بِمُسْتَنَّةٍ | ذَاتِ عَرَانِينَ وَدُقَاعِ |
| ۱۴ - كَانَهُمْ أَسَدٌ لَدَى أَشْبَلِ | يَنْهَتُنَّ فِي غِيلِ وَأَجْزَاعِ |
| ۱۵ - حَتَّى تَجَلَّتْ وَلَنَا غَايَةٌ | مِنْ بَيْنِ جَمْعٍ غَيْرِ جُمَاعِ |
| ۱۶ - هَلَّا سَأَلْتَ الْخَيْلَ إِذْ قَلَّصْتَ | مَا كَانَ إِنْطَائِي وَإِسْرَاعِي |
| ۱۷ - هَلْ أَبْذُلُ الْمَالَ عَلَى حُبِّهِ | فِيهِمْ، وَآتَى دَعْوَةَ الدَّاعِي |

- ١٨- وَأَضْرَبَ الْقَوْسَ يَوْمَ الْوَعَى بِالسَّيْفِ لَمْ يَقْصُرْ بِهِ بَاعِي
 ١٩- وَأَقْطَعَ الْحَرْقُ يُخَافُ الرَّدَى فِيهِ، عَلَى أَدْمَاءَ هِلَوَاع
 ٢٠- ذَاتِ أَصَاهِيَجَ جُمَالِيَّةَ حُشَّتْ بِحَارِيٍّ وَأَقْطَعَ
 ٢١- تُعْطَى عَلَى الْأَيْنِ وَتَنْجُو مِنَ الْضَرْبِ أُمُونٍ غَيْرِ مِظْلَاعِ
 ٢٢- كَأَنَّ أَطْرَافَ وَلِيَّاتِهَا فِي شَمَائِلِ حَصَاءَ زَعَزَاعِ
 ٢٣- أُرَينَ الرَّحْلَ بِمَعْقُومَةٍ حَارِيَّةٍ أَوْ ذَاتِ أَقْطَاعِ
 ٢٤- أَفْضِي بِهَا الْحَاجَاتِ، إِنَّ الْفَتَى رَهْنٌ بِذِي لَوْنَيْنِ خَدَّاعِ

(75) 訳

- 1- 彼女は、悪口を言うつもりはなかったが、“少しお待ちください。あなたの声を聞いて、ああ、あなただわ、と気づきました”と言った。
- 2- そなたは彼が夫であることを疑った。だが、戦争というものは苦痛をとめない、すべてのものをかえる破壊者（食人鬼）である¹⁾。
- 3- 戦争を味わった者はその味が苦いことに気づく。戦争は彼を荒地に引き留める。
- 4- （長い間被っていた）ヘルメットは私の頭から髪を脱落させた。浅い眠りのほか、睡眠をむさぼることもなかった²⁾。
- 5- 私はバヌー・マーリク（アウス族）すべてのために奮闘した。各自もことごとくマーリクのために全力を尽くした³⁾。
- 6- 私は敵に備えて二重織りのゆったりした鎧で身を固めたが、それは平野のなかの池（の水面のさざなみ）のように銀色に輝いていた。
- 7- 私は鎧の裾を波紋のついた剣（の鞘のかぎ）に引っ掛け（て軽くす）るが、その剣は塩のように白く輝いた、インド鉄製のものであった⁴⁾。
- 8- 剣の刃は強固で切れ味はこの上なく鋭かった。加えて、私は褐色の堅牢な盾を備えていた⁵⁾。
- 9- （これらが）死を賭して警戒しながらも、不安に動揺することなく戦う勇者の武器である。
- 10- 思慮分別と剛毅さは、偽善と弱気と気迷いより優れている。
- 11- 砂ライチョウは、その雛とは異なる。人々の中に放牧されている者は、牧人とは異なる⁶⁾。
- 12- 我らは（味方が）殺害されても苦にしない。これに対しては、敵に同害報復をする。

1) 詩人はここで自身のことを3人称に変えている。

2) tahjā「浅い眠り」。Lisān al-ʿArab の haja'a の項にこの一行が引用されている。

3) マーリクはアウスの族長。詩人は司令官。アルアスマイーは、この行の下句はアラブが述べた最も確固とした言葉であると独特な評価をしている。

4) 剣を塩にたとえる例は No. 20, 26行に見られる。

5) 盾が褐色と言うのは、ラクダの皮で作られているからと見られる。

6) 支配者は非支配者とは異なる。経験、年齢、能力を重視し、出来うれば多勢を擁する指導者になれ、と言っている。

- サーウにはサーウの仕返しをする⁷⁾。
- 13- 我らは敵を、指揮者と防ぎ手らを擁する強力な軍勢で、我らの手元から追い返す。
- 14- 彼らはまるで、藪の中や溪谷の屈曲部で子を抱え、咆哮しているライオンのようなものである。
- 15- やがて戦いが始まると（各部族から寄せ集めの）軍勢ではなく、わが部族だけからなる軍勢の真っ只中に軍旗が翻る⁸⁾。
- 16- そなたは、戦争が争いの裾をたくし上げられるとき、私が緩急自在に戦った様子をなぜ騎士らに尋ねないのか⁹⁾。
- 17- （また尋ねてみよ、）私が大切な財産を彼らに与えるのか、あるいは、助けを求めるものに依って、決して遅れを取らないのか、と。
- 18- 私は戦いの日、敵のヘルメットの天辺を剣で強襲する。私の腕は剣を振り下ろす力を十分持っている。
- 19- 私は死の危険をたたえた広大な砂漠を、むやみに進みたがる白い雌ラクダに乗って横断する。
- 20- この雌ラクダは多様な歩調をこなし、雄ラクダのように強く、アルヒーラ産の鞍を載せそこに敷物をかぶせている。
- 21- 疲れていても良く駆け、鞭をあててせかす必要は無い。また、よろけることもなく安全である。
- 22- （ラクダが早駆けすると）ラクダの鞍敷きの端は北風に乗ってあたりのものを揺さぶり、吹き飛ばすようである。
- 23- 私はラクダの鞍をアルヒーラ産の多彩な敷物や刺繍した敷物で飾った¹⁰⁾。
- 24- この雌ラクダでもって、私は望みをかなえる。だが、まことに男子は、目に見えない善悪二色の主である運命に翻弄されるものだ。

7) サーウ (sāʾ) は「穀物の計量単位」。1 sāʾ = 4 mudd, 1 mudd = 約18リットル、または、5か3分の1リットル。ただし、地域により大きく異なる。

8) tajallat の主語は戦争と思われる。「戦争が現れる、戦いが始まる」の意味でこの動詞が良く使われる。

9) qallasat 「たくし上げられる」の主語も15行の tajallat のそれと同じく戦争と解した。解説では、臆病者は戦闘に当たりいざと言うとき、睾丸が縮まる、すなわち、睾丸が主語だとしているが、見当違いと思う。

10) 22行と23行はアフマド・ブヌ・ウバイドが追加したものである。特に23行は20行と重なる部分がある。